

# 海外神社跡地に見る景観の変容

中島 三千男

NAKAJIMA Michio

(事業推進担当者)

## はじめに

本報告は3班全体のテーマ「環境と景観の資料化と体系化」の内、「様々な人間の活動が社会に残した痕跡の解析とそのデータ化」という課題に迫るものであり、とくに人間の諸活動の中でも「主に政治的、政策的な背景をもつもの」という事を、海外神社の跡地を素材にして考えて見ようというものである<sup>(1)</sup>。

この海外神社跡地を素材に、「環境と景観の資料化と体系化」というテーマに迫るという事は、どういふ事なのか、率直に言って未だ手探りの状況である。残り3年間の調査・研究を通じてその事を考えて見たいと思っているが、今回はその事を考えるためにも、中間的な試論として、海外神社跡地が今日どのようになっているのか、その景観の変容を取り上げて見たい<sup>(2)</sup>。

## I 調査の経過

明治維新以降、1945年までの約80年間の間に、日本人の移民や日本国政府等によって、アジア地域に建てられた海外神社は、今日判明しているだけでも凡そ1600余社にのぼる<sup>(3)</sup>。

COEの調査活動では、初年度の活動として、昨年秋に旧樺太（現ロシア連邦南サハリン、以後樺太と表記）地域の調査を行い<sup>(4)</sup>、2年度の今年の夏には旧南洋群島（現北マリアナ諸島連邦、及びパラオ共和国、以下南洋群島と表記）の調査を行った<sup>(5)</sup>が、筆者はこれ以前にも1990年以降様々な機会をとらえて海外神社の跡地調査を行ってきた。1990年の上海神社の跡地調査を皮切りに、旧中華民国（現中華人民共和国、以下中華民国と表記）では、北京・天津<sup>(6)</sup>（2000年）、青島<sup>(7)</sup>（2003年）の調査、旧満州（現中華人民共和国、以下満州と表記）では新京（現長春）・吉林・延吉・圖門・龍井<sup>(8)</sup>（2002年）の調査、旧関東州（現中華人民共和国、以下関東州と表記）では大連・旅順・金州<sup>(9)</sup>（2004年）の調査、旧台湾（以下台湾と表記）では、東部旧花蓮港庁を中心とした、2度にわたる調査<sup>(10)</sup>（1992年、1996年）、旧朝鮮（現大韓民国、以下朝鮮と表記）では釜山・京城（2001年）の調査、旧昭南島（現シンガポール、以下昭南島と表記）では1993年の調査等である。

これらを併せると79社に及ぶ神社跡地を探索して来たことになる。海外神社全体の、約1600余社という数から言えば、僅か5%にも満たない数字であるが、一応、戦前に海外神社が建てられた、アジアの主要な地域は全てカバーした事になる。

今、それらの海外神社跡地の現況、景観の変容を地域別に示すと表1のようになる。全体から言え

表 1 海外神社跡地現況表

番号	旧支配地名	神社名	鎮座地	社格	創立年	本殿面積	境内面積	現況	残存状況	調査年
1	台湾	和泉神社	台北市台北市	官大	1900	31.60	115.600	ホテル(順山大飯店)		1992.09
2		台湾護国神社	台北市台北市	官大	1940			(台湾)忠烈廟		1992.09
3		高雄神社	高雄州高雄市	無	1912T		7.402	高雄忠烈廟・公園	階段、燈籠など一部改変されて残存	1992.09
4		台南神社	台南州台南市	官中	1920	8.80		大駝車場建設中		1992.09
5		關山神社	台南州台南市	官中	1896		1.006	明延平郡王廟として復活		1992.09
6		桃園神社	新竹州桃園街	無	1938	5.50	55.800	桃園忠烈廟	本道の社殿部分を含めてほぼ完全な形で残存	1996.08
7		花蓮港神社	花蓮港庁花蓮街	無	1916		19.577	花蓮港忠烈廟	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
8		吉野神社	吉野庄	無	1912			旧郡長宅・兵舎	境内の区画はそのまま	1992.09
9		豊田神社	豊田村	無	1915	6.00		碧雲寺	鳥居1基、燈籠4基、狛犬2体	1992.09
10		林田神社	鳳林庄林田村	無	1915	3.50	6.008	雑木林(檜郷他)	鳥居1基、燈籠4基、狛犬2体	1992.09
11		佐久間神社	蕃地タビト社	無	1923		6.220	文王柱の銅像・記念碑	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
12		玉里社	玉里街玉里	社	1928T			社殿部分(積部郷)	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
13		高砂社	平野精化	社	1931T			住宅密集地	不明	1996.08
14		瑞穂神社	瑞穂庄瑞穂村	社	1931T			小祠(福徳祠)	本殿跡のコンクリート石組みあり	1992.09
15		細香山社	玉里街細香山	社	1931T			朝建設中		1992.09
16		織羅社	玉里街織羅	社	1931T			個人の墓地	階段、燈籠4基、鳥居の柱跡4つ	1992.09
17		抜子社	瑞穂庄抜子	社	1933T			公園(中山公園)	石段など構造はそのまま	1992.09
18		壽社	壽庄壽	社	1933T			雑草	鳥居柱穴2、燈籠3基(2基は基壇のみ)、太鼓橋、階段一部階段跡	1992.09
19		タガハン祠	蕃地タガハン社	社	1935T			雑草	鳥居1基、燈籠6基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
20		太平祠	玉里郡タビラ社	社	1935T			山崩社跡(砂防堤)	忠魂碑	1992.09
21		銅門祠	蕃地ムクムク社	社	1936T			雑草	鳥居1基、燈籠8基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
22		大港口祠	研海庄大港口	社	1937T			雑草	鳥居1基、燈籠8基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
23		新坂社	研海庄新坂	社	1937T			キリスト教会(天主教会)	鳥居1基、燈籠8基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
24		大巴剎祠	鳳林郡大巴剎	社	1937T			廟(協天宮)	鳥居1基、燈籠8基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
25		カワフン祠	カワフン社	社	1938T			雑草	鳥居1基、石段など	1992.09
26		馬太鞍遙拝所	鳳林郡馬太鞍	遙				雑草	鳥居1基、石段など	1996.08
27		チヤカシ遙拝所	蕃地平林社	遙				雑草	鳥居1基、石段など	1992.09
28		樺太神社	樺太豊原市豊原町	官大	1910	13.28	21.716	個人会社事務所・公園	石段跡、本殿の基礎石組み	1992.09
29	樺太	樺太護国神社	大宇南豊原	官大	1935	6.000	6.000	市立病院	宝物殿(コンクリート)、燈籠基壇2、倒壊した燈籠	2003.10
30		豊原神社	大宇豊原	無	1910	5.41	5.118	検死所	階段、社殿基礎、燈籠基壇(?)、燈籠の等	2003.10
31		北辰神社	大宇北豊原	無	1924	1.50	1.226	駐車場、団地	鳥居台石、燈籠基壇(?)	2003.10
32		大山祇神社	豊原郡川上村	無	1921	3.00	980	畑地	鳥居の片足、鳥居の他の部分の残骸	2003.10
33		泊居神社	泊居町大字泊居	無	1921	9.00	2.921	雑草	社殿基礎、鳥居2基、忠魂碑、戦勝記念碑、燈籠基壇2対	2003.10
34		連子神社	泊居町大字連子	無	1931	2.15	2.055	雑草	燈籠基壇(?)	2003.10
35		真岡神社	真岡町大字真岡	無	1910	23.75	2.059	雑草	階段、下部石積擁壁、燈籠基壇、手水鉢	2003.10
36		蘭沼神社	眞岡郡蘭沼村	無	1922	1.50	1.000	雑草	鳥居台石2、狛犬台座(?)	2003.10
37		野田神社	野田郡野田町	無	1923	2.15	1.440	雑草	大燈籠基壇2	2003.10
38		稀荷神社	野田郡野田町	無	1923	2.15	1.440	雑草	燈籠基壇(?)	2003.10
39		垂庭神社	大泊支庁大泊町大字大泊	無	1914	3.19	3.000	牧草地	鳥居、手水鉢、鳥居台石(?)	2003.10
40	南洋群島	八幡神社	サイパン支庁サイパン島東村	無	1924	3.00	1.500	船舶カレッジ	階段、手水鉢、鳥居台石(?)	2003.10
41		南興神社	サイパン島チャランカ	無	1937	1.053	1.053	キリスト教会墓地	鳥居、手水鉢、階段、社号標、燈籠2基	2004.08
42		南陽神社	サイパン島南村アスリート	無	1936	1.860	1.860	公園	鳥居、本殿基壇、燈籠2対	2004.08
43		彩帆神社	サイパン島カラハナ町	無	1914	6.427	6.427	彩帆香取神社として再建	社号標、本殿基壇、階段、燈籠	2004.08
44		カラペラ神社	サイパン島北村カラペラ	無	1914	6.000	6.000	密林	社殿基壇2、階段2、燈籠基壇5対、太鼓橋、手水鉢、鳥居台石	2004.08
45		泉神社	サイパン島	無	1914			密林	鳥居、燈籠基壇2、石段、本殿基壇	2004.08
46		(蘭達コーヒー)	サイパン島	無	1914			密林	燈籠、燈籠基壇、鳥居(倒壊)、階段	2004.08
47		天仁安神社	テニアン島ソソソソ市街	無	1934	9.00	6.219	学校敷地	鳥居社の一部(?)	2004.08
48		住吉神社	テニアン島ソソソソ市街	無	1939	1.500	1.500	天仁安神社として再建	鳥居、燈籠1対、本殿基壇、玉垣、手水鉢、狛犬1対、階段	2004.08

49		和泉神社	テニアン島マルボ市街	無	1939		3.325	キリスト教画	本殿基壇、玉垣	2004.08
50		橋神社	テニアン島カーヒー	無	1939		1.816	社殿部分密林	本殿基壇、玉垣、燈籠基壇1対、鳥居(倒壊)、手水鉢	2004.08
51		日之出神社	テニアン島アーンガー	無	1939		2.166	公園	鳥居(片足)、燈籠4基、基壇、鳥居柱(1本倒壊)	2004.08
52		NKK神社	テニアン島	無	1939			草地	鳥居2基、燈籠3対、本殿基壇、玉垣	2004.08
53		羅光神社	テニアン島チューロ	無	1939		3.627	草地	社号標、階段、本殿基壇、玉垣、燈籠基壇1対、大灯籠基壇1対	2004.08
54		南光神社	ロタ島ルギ	無	1939		3.897	密林	階段、本殿基壇、拝殿基壇	2004.08
55		ロタ神社	ロタ島ソソソソ	無	1939		4.500	キリスト教画	本殿基壇	2004.08
56		南洋神社	パラオ支庁パラオ島コロパルニラ高地	無	1940		96.248	記念碑	階段2、社殿基壇、燈籠3対、手水舎、社号標、太鼓橋等	2004.08
57		カラスマオ神社	パラオ支庁パラオ島コロパルニラ高地	官大	1940		700	個人宅・再建	基壇2、手水鉢(?)、鳥居台石2、階段	2004.08
58		ベリリュウ神社	ベリリュウ島オプ島カラスマオ村	官大	1940		518	場所を移して再建	(旧社殿、鳥居)	2004.08
59	満州	建国忠霊廟	ベリリュウ島	無					本殿、拝殿部分そのまま現存、燈籠2基	2002.08
60		新京特別市	新京特別市	無	1940				鳥居、社殿の一部	2002.08
61		吉林神社	新京特別市敦化區	神	1915	18.25	6.156	幼稚園	鳥居、社殿の一部	2002.08
62		關島神社	吉林省吉林市	神	1924		6.403	公園		2002.08
63		延吉神社	關島省龍井街	神	1925		25.268	学校敷地		2002.08
64		延吉神社	延吉街西公園	神	1935		5.863	公園		2002.08
65		關門神社	關門	神	1933		3.359	公園		2002.08
66	關東州	關東州神社	關東州旅順市	官大	1938			海軍施設		2004.03
67		大連神社	大連市南山	神	1909	7.00		学校敷地	石段の一部	2004.03
68		沙河神社	大連市龍町	神	1914	16.85		病院	鳥居台石(?)	2004.03
69		柳崎屯留神社	大連市灣家屯	神	1919	4.78		個人宅		2004.03
70		小野田神社	大連市泡崖屯	神	1922	0.69		学校敷地		2004.03
71		金州神社	金州會新金州	神	1934	7.50		草地		2004.03
72	中華民國	北京神社	北京特別市布衣賓院	無	1940		6.000	社会科学学院		2000.09
73		天津神社	天津市福島街	無	1915		1.066	八、一礼堂		2000.09
74		青島神社	青島遼寧路	無	1919		6.412	電子台・公園		2003.03
75		台東神社	青島台東一路	無	1915		2.637	商店街	階段、鳥居台石2、玉垣の一部	2003.03
76		上海神社	上海江湾路	無	1933		1.089	陸軍施設		1990.11
77	朝鮮	朝鮮神宮	京城府南山	官大	1919	17.00	100.000	植物園(温室)、公園		2001.09
78		龍興山神社	釜山府弁天町	官小	1917	12.20	2.157	公園		2001.09
79	昭南島	昭南神社	昭南島	無	1943			ゴルフ場、密林	太鼓橋支柱、手水鉢、本殿基壇、社殿基壇	1993.08

1 「神社名」、「鎮座地」、「社格」、「創立年」、「本殿面積」、「境内面積」、「戦前の海外神社一覧」(園田稔・橋本正宣編『神道史大辞典』2004年7月、吉川弘文館)によった。  
2 「社格」の中で「官大」とは官幣大社、「国小」とは国幣小社、「県」とは県社、「無」とは無格社をそれぞれ指す。また社格ではないが、「神」は神饌幣帛指定神社、さらに「社」とは、台湾において簡便な神社として建てられたもの、「遙」とは遙拝所を指す。また「創立年」で「T」とあるのは「鎮座年」を表す。  
3 但し、番号37、44、45、51、57、59、78の7つの神社は上記、佐藤の一覧には載っていないものである。  
4 番号45の神社の正式名称は不明。倒壊した鳥居の柱に「南洋コーヒー株式会社」と刻まれているので、仮に(南洋コーヒー神社)と表記する。

ば僅かに5%に過ぎず、また地域的にも偏りがある。ここからいろんな分析をするには極めて慎重であらねばならないわけであるが、研究の今後の見通しを立てる意味において、中間報告としてこの表をもとに、神社跡地の景観変容の紹介と、そこから引き出す事のできるいくつかの分析を行っていききたい。

## II 海外神社跡地、神社の遺構・遺物の残存状況

1945年の日本の敗戦、植民地支配の崩壊から今日まで、60年の年月が過ぎ去ろうとしている。

筆者が調査を始めた1990年段階でもすでに40数年の年月が流れていた。それまで、一般に、海外神社は敗戦時、日本の植民地支配の精神的シンボルとして、現地人の放火・略奪・破壊の対象になったと言われていたので、実際に跡地調査を始める前までは、その痕跡さえ残っていないのではと<sup>(11)</sup>思っていた。しかしながら、この十数年の調査で、まず感じさせられたことは、意外に神社跡地の痕跡がはっきりと、しかも多く残っているという事であった。

表1でも明らかなように、今日その跡地がどのように利用されているのか、いないのかにかかわらず、その痕跡を全く留めないのは、25社、約32%に過ぎない。この中にはその神社跡地の付近に行きながらも、最終的にその場所を確定できなかつたり、また確定しても十分な調査が出来なかったものも含まれているので、実際にはもっと少ない数字になってくると考えている。

石やコンクリートで造られた、鳥居や燈籠、或いは手水鉢、また、境内に建てられた様々な記念碑、さらには階段や基壇部分といったものが数多く残されている。例えば、写真(1)、(2)は樺太の西海岸、旧泊居支庁の泊居に建てられた、泊居神社(1921年創立)<sup>(12)</sup>の跡地である。泊居の街から一望でき、また、泊居の街や日本海を見渡す事の出来る、絶好のロケーションに建てられた神社であるが、今日、2基の鳥居が立っており、手前の鳥居の右側には戦勝記念碑が半分土台の土砂を流されながらもかろうじて立っている。また、社殿の基壇部分や社殿の右側には忠魂碑も残っているし、さらに燈籠の基壇も4つ(2対)<sup>(13)</sup>残っている。戦前の神社境内の構築物が、全て揃って残っている例である。

また、台湾の東部、旧花蓮港庁下玉里郡の玉里社(1928年鎮座)もよく残っている。玉里の街を見下ろす山裾の小高い丘に建てられた神社である。写真(3)は旧玉里社の第2階段を上りきった、第2ステップに立つ、二の鳥居と燈籠であるが、図(1)に見られる如く、全部で、鳥居が2基、それに燈籠17基(内完全なもの9基)がずらりと並んで立っており、それは見事な景観であった。写真(4)に見られる如く、一の鳥居の片足(柱)が民家の玄関の柱として利用されているのも面白い。<sup>(14)</sup>

この泊居神社跡や玉里社跡のように、神社の石造構築物がほとんど揃って残っているものは、勿論少ないわけであるが、表1の如く、多くの神社跡には階段や燈籠や鳥居や手水鉢、或いは階段等が単体であるいはいくつかの組合わせで残っており、神社跡地であることが容易に確定できる。

また、石造構築物だけではなく、木造を含む当時の建築物が残っている神社跡地もある。一つは、台湾の北部、旧新竹州桃園郡の桃園(現桃園国際空港のある所)に建てられた桃園神社跡地である。この神社は現在桃園縣の忠烈祠に改変されているが(写真5)、燈籠や鳥居、階段、手水鉢など石造構築物が残っているだけでなく、本殿・拝殿(写真6)、社務所、中門、祝詞舎、手水舎(写真7)などの当時の建築物がほぼそのまま残っている。ここでは、本殿の中の神々が入れ替わっているだけで



写真1 樺太 旧泊居支庁下、泊居町に建てられた泊居神社跡  
手前、一の鳥居の右手に、戦勝記念碑が見える。



写真2 同前  
社殿側から海を見晴らす。手前右手に社殿の基壇、左側に忠魂碑も見える。

写真3 台湾 旧花蓮港庁下、玉里街に建てられた、玉里社跡  
二の鳥居と燈籠。





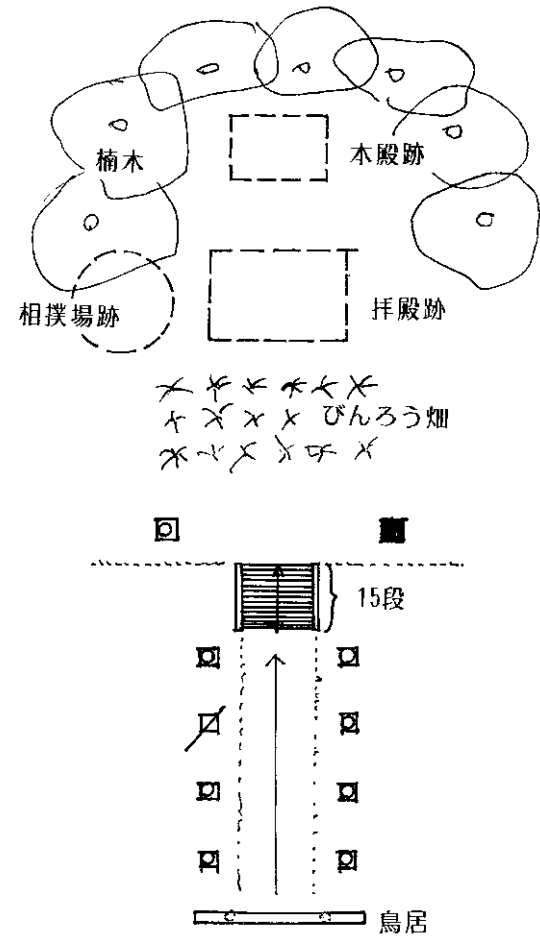
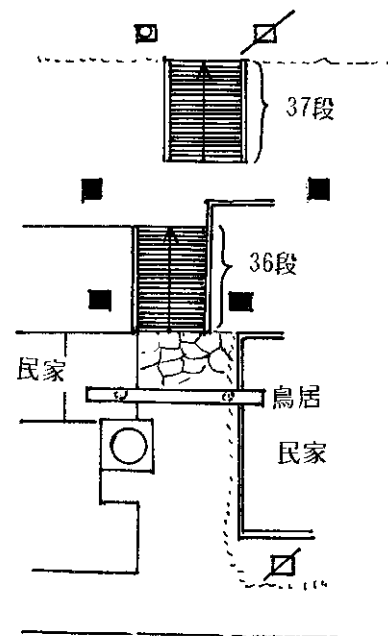


写真4 同前  
一の鳥居の片足（柱）は民家の柱のよ  
うな形になっている。



- 灯籠（完全なもの）
- 灯籠（宝珠無し）
- ◻ 灯籠（倒れているもの）
- ◼ 灯籠（崩れているもの）

図(1) 台湾旧玉里社跡現況図（おおよその配置を示したもの）  
（拙稿「台湾の神社跡を訪ねて」、『歴史と民俗』10号、1993年8月、91頁）



写真5 台湾旧新竹州下、桃園街に建てられた桃園神社跡  
現在桃園縣忠烈祠に改変されているが、一部改変されながらも多くの旧神社施設が残っている。

写真6 同前  
木造の本殿、拝殿がそのまま残る。



写真7 同前  
手水舎と手水鉢



あり、これだけ旧神社の面影をはほそのまま残しているのは、これまでの調査の限りではここだけである。後で見るように、台湾の主要な神社は多く忠烈祠に改変されるわけであるが、今日、それらの建築物は多く多彩式の中国風の社殿に建て替えられている。ただ、この桃園縣忠烈祠だけは、日本時代の神社の社殿をそのまま利用していることもあって、他の忠烈祠にはない独特の雰囲気醸しだしている。

筆者が調査に訪れた日、ちょうど若いカップルが写真屋とともに、この忠烈祠を背景に結婚の記念写真を撮りに来ていた(写真8)。また、写真(9)は1987年に日本の神職が訪れ、正装して参拝している様子である(大場俊賢氏提供)。

この他に、当時の建築物が残っているのは、満州の新京(現長春)に建てられた、建国忠霊廟である(写真10, 11)。建国忠霊廟は1940年、建国神廟とともに建てられた。天照大神を祀る建国神廟が日本の伊勢神宮をなぞらえたものとすれば、建国忠霊廟は靖国神社をなぞらえて造られたものである<sup>(15)</sup>。今日、拝殿、本殿部分がそのまま残っており、旧参道の燈籠も一部崩れながらも残っている。中に入る事は出来ず、今日どのように利用されているのか不明であったが、同行していただいた長春師範大学の方の説明によると、現在、歴史的文物として保存される計画があるとのことであった。

また、同じく新京の新京神社(1915年創立)跡地も、現在幼稚園として利用されているが、鳥居が門として利用されており(写真12)、中には入れなかったため確認は出来ていないが、社殿もいくつか残っていて、園舎として利用されているとの事である<sup>(16)</sup>。(写真13)

以上、海外神社の跡地に石造建造物や木造を含む当時の建築物が意外に多く残っていることを見て来たわけだが、この他にも神社境内にあった遺物が、跡地ではなく、場所を移動して残されている場合もある。サハリンの郷土史博物館の玄関前の両側に飾られている狛犬(獅子)像は、これはかつて樺太護国神社(後述)に奉安されていたものである。また台北の台湾省立博物館の前庭に置かれている水牛像は、これは台湾護国神社の境内にあったものを移したものであるという。このように、重量がありまた美術品としての価値のあるものは、公的施設に移されて公開されているが、簡単に移動できるものは、戦後の混乱期に、またその後の長い年月の間に、社殿跡から移動され、その後不明となったものも多いようである。南洋群島のペリリュウ神社跡地を訪れた時には、旧社殿跡にあった1基の燈籠を自分の家に持ち帰ったという話を現地人に聞いたし、また台湾の抜き社の木の鳥居は橋の部材として利用されたという話も聞いた。さらには台湾の台南嘉義に建てられた、関子嶺神社の石造社号標が階段の踏み石として、また、同神社の賽銭箱が学校のごみ箱として、利用されたという話も聞いた<sup>(17)</sup>。

### Ⅲ 海外神社跡地の景観変容

さて、いよいよ本題に入ろう。表2はこれまで現地を訪れた79社の海外神社跡地が今日どのような状況になっているのか、どのように景観を変容させているかという事を、現況・景観別にまとめたものである。

海外神社跡地の現況・景観の変容は大きく4つに分ける事が出来る。1つは、そのまま未利用のまま放置され草地や荒地の中に神社の遺構が残されていたり、また、雑木林や密林(ジャングル)の中



写真8 同前  
旧神社時代の石段上で、結婚の記念写真を撮る台湾人のカップル。



写真9 同前  
日本殿前で拝礼する日本の神職たち(1987年、大場俊賢氏提供)

写真11 同前  
拝殿を隙間から撮る。



写真10 満州 旧新京(長春)に建てられた建国忠霊廟跡  
現存する旧本殿、拝殿部分を裏側から見る。







写真12 満州 旧新京(長春)に建てられた新京神社跡  
鳥居が幼稚園のゲートになっている。

写真13 同前  
社殿部分も幼稚園の教室として利用されているとのこと。



に遺構が残されている例である(以下、「放置」と表記)。2つめは、神社跡地が今日何らかの形で改変され、手を加えられて、その中に神社の遺構の一部が残っていたり、あるいは全く痕跡さえ見られないという例である(以下、「改変」と表記)。3つめは、戦前の海外神社が、戦後一旦廃絶し、その機能を喪失したにも拘わらず、1980年代以降に「再建」されたものである(以下、「再建」と表記)。4つめは、海外神社が、もともとあった、ある宗教施設を利用して創立された場合、日本の敗戦により、それが元の宗教施設に戻った例、いわば「復活」した例である(以下、「復活」と表記)。

表2はこの4つの区分に従って、該当する神社名を入れたものである。但し旧官国幣社のように多くの社殿と広大な境内をもっている場合、神社跡地といっても本殿と他の社殿、またそれらと境内の跡地が別々に利用されて、景観を変容させている場合がある。例えば朝鮮神宮(京城府南山, 1919年創立, 官幣大社)の場合、広大な境内は今日南山公園として利用されており、本殿部分は植物園(温室)として利用され、また他の社殿部分には安重根の記念館もある。また、昭南神社(昭南島, 1943年創立)の場合、本殿部分はジャングルの中に埋没しているが、その他の社殿、境内部分はゴルフ場となっている。このような場合は1つの神社跡地が、異なった現況・景観の中にそれぞれ記入されているので、神社名の合計は79社を超えている。

さて、調査事例が少なく、また地域的にも偏りがあるわけであるが、これまで調査した79の神社跡地の内、一番多いのは跡地が何らかの形で改変され、手をくわえられて利用されている「改変」の事例である。先程述べた重複を避けるために、今仮に現況を本殿跡地部分に固定して、その現況の数を数えて見れば、「改変」された事例は53神社で全体の67%を占める。2番目に多いのは「放置」されている例で、20社で25%である。「再建」された例は5社、神社となる前のものに「復活」した例は1社だけである。

さて、これらをもう少し具体的に見ておこう。まず、数が少ない事例から見ていきたい。

### 1 「復活」の例

「復活」した海外神社跡地とは、台湾の開山神社跡地の例である。台南州台南市にあった開山神社は(写真14)、日本の台湾統治が始まった翌年、1896年に創立(翌年県社に列格)されたもので、台湾で最も早く創立された海外神社である。しかし、創立といっても、この神社は新しく建てられたのではなく、17世紀の半ばオランダ人支配から台湾を解放し、また明朝再興を掲げて清軍と戦い、



写真14 台湾 旧台南市, 旧開山王廟を改変して創立された開山神社  
(松本曉美・謝森展『台湾懐旧』, 1990年11月, 創意力文化事業有限公司, 246頁)

表2 現況別旧海外神社一覧

	現況	旧神社名
改変	公園	高雄神社・壽社・新城社(台) 樺太神社(樺) 朝鮮神宮・龍頭山神社(朝) 青島神社(中) 南陽神社・日の出神社(南) 吉林神社・延吉神社・圖門神社(満)
	宗教施設	新城社・馬太鞍遙拝所(台・教会)、和泉神社・ロタ神社(南・キリスト教祠)、豊田神社(台・寺院)、観音山社・太巴壘祠・織羅社(台・廟・小祠)
	墓地	抜子社(台)、南興神社(南・教会)
	忠烈祠	台湾護国神社・高雄神社・花蓮港神社・桃園神社(台)
	記念碑等	佐久間神社・壽社(台)、大山祇神社(南)、朝鮮神宮・龍頭山神社(朝)
	幼稚園・学校等	大連神社・小野田神社(関)、亜庭神社(樺)、新京神社・間島神社(満)、天仁安神社(南)
	病院	樺太護国神社(樺)、沙河口神社(関)
	軍施設	吉野神社(台)、関東神宮(関)、天津神社・上海神社(中)
	その他	台湾神宮(台・ホテル)、高砂社(台・住宅地)、樺太神社(樺・会社事務所)、豊原神社(樺・検死所)、真岡神社(樺・会社)、北辰神社(樺・駐車場)、柳樹屯稻荷神社(関・個人宅)、朝鮮神宮(朝・植物園(温室))、南洋神社(南・個人宅)、ペリリュウ神社(南・採石場)、青島神社(中・電子台)、北京神社(中・社会科学院)、台東鎮神社(中・商店街)、昭南神社(昭・ゴルフ場)
	畑地・牧草地	瑞穂祠・玉里社(台)、大山祇神社・稲荷神社(樺)
放置	草地・荒地・雑木林・密林	林田神社・太平祠・銅門祠・大港口祠・カウワン祠・タガハン祠・チャカン遙拝所(台)、泊居神社・追手神社・蘭泊神社・野田神社(樺)、金州神社(関)、カラベラ神社・泉神社・(南洋コーヒー神社)・橋神社・NKK神社・羅宗神社・南光神社・ガラスマオ神社(南)、昭南神社(昭)、建国忠霊廟(満)
再建		彩帆神社(南・彩帆香取神社として再建)、八幡神社(南・彩帆八幡神社として再建)、住吉神社(南・天仁中央神社として再建)・ペリリュウ神社(南・旧跡地の近くに再建)、南洋神社(南・私邸内の社殿部分に再建)
復活		開山神社(台)

旧神社名の後の( )は、日本の支配下に入った地域の旧名(表1の「旧支配地名」)の頭文字である。



それ故に台湾の漢民族から崇拜を集めていた鄭成功を祀っていた小祠（開山王廟あるいは開台聖廟と呼ばれていた）を、開山神社と改称、改変したものである。祭神はそのまま鄭成功とされていたが、これは鄭成功の母親が日本人であったということであり、その意味で開山神社の創立は、日本の台湾支配を正当化する意味合いを持っていた。<sup>(18)</sup>

今日は、元に戻り、明延平郡王祠として鄭成功を祀る廟となっているが、日本の統治の開始による、従来の廟から開山神社への改変、さらには日本統治の終了による、今日の明延平郡王祠への改変の具体相は興味ある課題である。この点の具体的分析は後日を期したい。

## 2 「再建」の例

次に、「再建」された神社について見ていこう。旧南洋群島に建てられた神社の中で、再建された神社が5つある。1つはテニアン島の天仁央（安）神社であり、2つはサイパン島の彩帆香取神社であり、3つめは同島の八幡神社（以上の3つは現北マリアナ諸島連邦）、4つめはコロール島の南洋神社であり、5つめはペリリュウ島（以上の2つは、現パラオ共和国）に建てられたペリリュウ神社である。<sup>(19)</sup>

1つめの、天仁央神社はテニアン島にあった元住吉神社が1984年に天仁央（テニアン）神社として、同奉賛会により「再建」されたものである。

日本統治下にあっては、テニアン島には6つの神社があり、その中の一つとして、市街のソンソンに島の中心的神社として、島全域を氏子区域とする天仁安神社が建てられていた（1934年創立）。しかし、これは1944年のアメリカ軍の爆撃、占領によって壊滅的な打撃を受け消滅してしまった（跡地には、学校や教会が建てられている）。写真（15）は、その天仁安神社の鳥居とされているが、これについては確認していない。

また、住吉神社は1939年にソンソン第1農場を氏子区域とする神社として創立されたものであった（以下、サイパン、テニアン、ロタの各島で「農場」という言葉が出てくるが、これは南洋興発株式会社の砂糖キビ〈甘蔗〉栽培の農場である）。

この住吉神社跡地に1984年に奉賛会によって、天仁央神社が再建されたものである。写真（16）は入り口部分であるが、左側奥に「天仁央神社」と書かれた社号標や燈籠の上部も見えている。また、写真では見えないが、階段の途中には、手水鉢が置かれている。この階段や手水鉢、鳥居、燈籠は旧住吉神社の遺構・遺物である階段を上りきると、両側に「清流社」と「天仁央神社奉賛会」の奉納になる新しい狛犬が建てられている。さらに進むと社殿部分がある（写真17）。本殿は再建にあたって新しく据えられたものであり、社殿を囲む柵（玉垣）や本殿の基壇、狛犬は元の住吉神社時代のものである。

2つめの、彩帆香取神社は、南洋群島の神社の中で、最も早く建てられた彩帆神社（写真18、1914年サイパン島のガラパン町香取山に創立、氏子区域ガラパン町一円）が再建されたものである。1944年のアメリカ軍との戦闘で炎上、消失したが、それを1985年に彩帆（サイパン）香取神社として再建されたものである。

境内の「再建の記」には以下のように書かれている。「北マリアナ連邦の繁栄と平和、並びに日本国との悠久の親善友好を祈念しつつ…連邦政府の歴史事跡を保存尊重する考えと日本の香取神社連合



写真15 南洋群島 テニアン島、米軍の爆撃で壊された鳥居。1944年8月。神社名は不明。（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編「沖縄県史ビジュアル版9 近代②旧南洋群島と沖縄県人—テニアン—」、2002年2月、47頁）



写真16 南洋群島 テニアン島、旧住吉神社跡  
テニアン（天仁央）神社として再建された。階段や鳥居は住吉神社時代のもの。



写真17 同前  
玉垣、本殿基壇、狛犬は旧住吉神社時代のもの。基壇の上に石造の新しい本殿が置かれている。





写真18 南洋群島 サイパン島に建てられた彩帆神社  
(小菅輝雄『南洋群島写真帖』, 1978年5月, グラム新報社東京支局, 70頁)



写真19 南洋群島 サイパン島, 彩帆神社跡地に再建された彩帆香取神社  
拝殿の奥に本殿へと続く彩帆神社時代の階段が見える。



写真20 同前



写真21 南洋群島 サイパン島, 八幡神社跡に再建された彩帆八幡神社  
鳥居の奥, 巨大な岩に囲まれた奥に社殿がある。



写真22 同前  
旧八幡神社時代の鳥居が倒れたまま残されている。



会との合意に依り…神社祭典の斎場を整へ、以て香取大神の宏大なる神徳を仰ぎ太平洋の国々の平和と諸国民の幸福を祈念する次第である。香取神社連合会・マリアナ観光局」

サイパンの中心街，ガラパン地区の旧香取山を背景にした砂糖王公園の一角，砂糖王といわれた南洋興発株式会社社長の松江春次の巨大な銅像（1934年創造）とともにある。再建された彩帆香取神社の鳥居や燈籠，社殿（写真19，20）は全部新造されたもので，当時の面影を忍ばしてくれるのは，僅かに鳥居の手前に残されている，崩れた燈籠と社号標，そして拝殿から本殿に続く階段と本殿の基壇だけである。

なお，拝殿の左側に彩帆鎮霊社というものが建てられているが，その拝殿の天井には「彩帆鎮霊社御創建奉仕者名 清流社青年神職・南洋群島慰霊巡拝団（個人名略）昭和六拾年六月吉祥日」と書いた札が掲げられている。

3つめのサイパン島の彩帆八幡神社は，1924年にサイパン島の東村に建てられ，東村一円を氏子区域とする八幡神社が，1981年に埼玉県久伊豆神社の小林茂宮司らにより，彩帆八幡神社として再建されたものである。祭神はもと大抵比賣神と息長帯姫であったが，再建されてからはサイパン国魂大神，八幡大神，久伊豆大神の3神である。再建の経緯はサイパンを訪れた小林宮司の子息が，唯一神社の面影を残していた旧八幡神社を見て，再建を決意した事による。旧八幡神社が面影を留めていたのは，戦後境内地の所有者となった現地人のフランク・ゲレロ氏が大切に守りつづけてきたからであった。<sup>(20)</sup>

社殿は巨大な2枚の岩の間に挟まれた空間（参道）の奥に安置され，この岩の入り口に鳥居が立てられている（写真21）。この社殿と鳥居は再建の際，日本で作って運んだものである。この鳥居の手前に，前の八幡神社時代の手水鉢と鳥居が倒れたまま残されており（写真22），さらにその前には社号標，燈籠，参道の階段が草に埋もれて残っている。

4つめの南洋神社は1940年，（パラオ）コロール島アルミス高地に南洋群島の総鎮守として建てられた官幣大社である（写真23）。境内地は96,248坪，樺太神社の約5倍，台湾神宮，朝鮮神宮に匹敵する広さであった。敗戦後，1945年9月，米国側の了解のもとに「奉焼式」を行い，本殿などの社殿部分を日本側の手によって「奉焼」した。現在，この南洋神社跡地の中心部分は私有地となって個人の邸宅が建っている。この邸宅の前庭のような形で（写真24），旧本殿拝殿の基礎石組みの上に，鳥居や燈籠，狛犬や社殿が新しく設置されて（写真25）1997年に「再建」された。本殿右側に再建の趣旨を述べた石碑が立っているが，そこには，次のように書かれている。「（前略）日本人がその地に定住するには，先ず土地の国魂を祀り開拓の先輩を敬重し，敬神崇祖のまごころを尽くすことから始まった。その精神の集中するところが神社であった。しかしながら今次大東亜戦争の挫折によって南洋神社も一旦撤収のやむなきに至った。ここに，新たな時代を迎えて日パ両国の有志により神社の歴史的由縁に基づきこれを再建し祖先と英霊の御加護を祈り南洋の発展と平和の基点とし以って世界文明の進運に寄与せんと願ふものである<sup>(21)</sup> 平成9年10月吉日」

また，本殿の左側には別の石碑（戦死者顕彰碑）が設置されているが，そこには次のような文が日本語と英語で刻まれている。「この南洋神社には，日本とパラオの祖先神と大東亜戦争の戦死者が刻まれている。ここに，パラオの戦死者の名を刻み，その勇気を讃える。 名越二荒之助」。

神社の遺構・遺物については実に多く残っている。



写真23 南洋群島 コロール島（パラオ）に建てられた官幣大社南洋神社の鳥瞰図  
（官幣大社南洋神社奉賛会編「官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖」，1941年6月，1頁）



写真24 南洋群島 コロール島（パラオ）旧南洋神社跡に再建された南洋神社  
写真23の左上，本殿・拝殿部分に神社が再建され，右上の広場の部分に個人の邸宅が建てられている。新設された石造りの社殿裏から邸宅を臨む。



写真25 同前  
旧拝殿・本殿部分の階段状の基壇の上に，鳥居，燈籠，社殿が建てられている。



写真26 同前  
現在も残る手水舎



社殿部分の基壇，参道の入り口の大燈籠（1対），神社境内入り口の大燈籠，太鼓橋，朽ちた木製の社号標，そして社殿に向かう階段．社殿面にあがる階段．そのたもとに大燈籠（1対），手水鉢，手水舎（写真26）などである．

5つめは，ペリリュウ島のペリリュウ神社である．ペリリュウ島はコロール島の南方にある小さな島であるが，フィリピン防衛（攻略）の為に，日米両軍が73日間にわたって死闘を繰りひろげた島であった．

この島にあった，ペリリュウ神社は創建年は不明であるが，ペリリュウ島一円を氏子区域とした神社であった．それが，1982年に清流社によってペリリュウ神社として「再建」されたものである（写真27）．これまで見た4つの「再建」された神社は全て神社跡地に建てられていたが，ガイドの説明によると，この新ペリリュウ神社は旧ペリリュウ神社の跡地に建てられたのではなく，旧神社跡地より少し上がった高台の上に新たに作られたものである．旧神社跡地は現在採石（ライム・ストーン）場になっている．

社殿の左側に，その旧神社跡地にあった本殿と鳥居が移設されている．その他の設備は全て新しく創られたものである．ペリリュウ神社と書かれた，鳥居の額東は今日パラオの特産品となっている，「ストーリーボード」を模して作られている．また，本殿の左下には神社の由緒が次のように刻まれている．

「この神社は青年神職等の組織する清流社が昭和五十七年（1982）年五月建立したもので，先の大戦において祖国日本を護るために此の地で散華された，多くの陸海将兵と民間人すべての御霊を祀る鎮魂のところです．祭典は毎年行はれ祖国の安泰と世界の平和を祈念致します．平成十三年七月吉日 清流社」

また，前の神社跡地時代から建てられていたものが，米太平洋艦隊の指揮官ミニッツの次の言葉を日本文と英文で両面に刻んだ石碑も移設されている．

「諸国から訪れる旅人たちよ，この島を守る為に日本軍人がいかに勇敢な愛国心をもって戦いそして玉碎したかを伝えられよ」<sup>(22)</sup>

以上，5つの「再建」された神社を見てきたが，①いずれも，南洋群島に建てられた神社であること，②1880年以降に「再建」されていること，③主体になったのは日本の神社関係者であること，等がその特徴としてあげる事ができるであろう．とくに，③点目で目立つのは清流社という団体である．この団体は青年神職等によって組織された民族派の団体で，一般にはいわゆる「新右翼」に括られる団体である．この団体は，5つの「再建」神社の中でペリリュウ神社の再建に中心にかかわり，また，天仁安神社においても燈籠を奉納し，さらに，彩帆香取神社においても，その境内に鎮霊社を建てている．

### 3 「放置」の例

次に，今日，「放置」されたままになっていて，草地や或いは荒地の中にその遺構を残し，またその痕跡を留めているもの，さらに雑木林や密林（ジャングル）の中に埋没してしまっている神社跡地の様子，景観を見ていこう．

まず「放置」されたままになっているものの中で，階段，鳥居，燈籠，社殿の基壇などがほとんど揃っていて，神社の全体像を思い浮かべる事の出来る神社跡地は，台湾では大港口祠，タガハン祠，



写真27 南洋群島 ペリリュウ島（パラオ）に再建されたペリリュウ神社  
旧ペリリュウ神社跡地を少し上った高台に新しく再建された。



写真28 台湾 旧花蓮港庁下，新社庄に建てられた大港口祠跡  
階段，鳥居，燈籠などが放置されたままになっている。



樺太では泊居神社，南洋群島ではカラベラ神社，泉神社，仮称（南洋コーヒー）神社（以上，サイパン島），橘神社，NKK神社，羅宗神社（以上，テニアン島），ガラスマオ神社（パラオ，バベルダオブ島）それに昭南島（シンガポール）の昭南神社などの跡地である。泊居神社についてはすでに見たので，もう少し他の例でいくつか紹介しておこう。

写真（28）は台湾旧花蓮港庁鳳林郡新社庄にあった大港口祠（1937年創立）跡である。港を望む丘陵地にあり，道路に面してすぐに階段がある。階段を上ったところに鳥居が1基立っており（鳥居の上部，笠木の中央に角状の突起が付けられている），また写真では判りにくい階段に沿って2列4基の燈籠がたっており，また階段を上り詰めたところ，鳥居の両側にも1対の燈籠がある。また，手水鉢らしきものもあった。

南洋群島には，「放置」された神社跡地が多い。まず，サイパン島のカラベラ神社は1919年，旧北村に立てられ，北村一円が氏子区域となっていた神社である。山裾の傾斜地を利用して創られたこの神社は，今日すっかりジャングルの中に埋もれている。道路から，牧場を横切り，ジャングルの中に分け入っていくと太鼓橋，手水鉢，鳥居台石，階段，その脇に点々と残る燈籠の基壇（5対10基），それを上りきったところに社殿基壇が二つ（本殿と摂社か）斜めの線で少し離れて残っている（写真29）。サイパン島の神社は彩帆神社が6,427坪と最大で，カラベラ神社を除く神社はいずれも1千坪台の境内地であるが，この神社は6,000坪と彩帆神社に匹敵する広さを持っていた。上にみた神社遺構・遺物の残存状況はそれを窺わせるに十分なものであった。

サイパン島の泉神社もジャングルの中に埋もれてしまっている。そしてカラベラ神社ほどではないが，鳥居1基（写真30），燈籠基壇2つ，石段2つ，本殿基壇1つが残っており，神社の在りし日を偲ぶことができる。

サイパンのこれら2つの神社跡地は，文字通り，「放置」されジャングルの中に埋もれてしまった例であるが，同じ南洋群島に建てられた神社の中でもテニアン島に建てられた神社跡地は「放置」といっても少し説明が必要になってくる。テニアン島の3つの神社跡地，橘神社，羅宗神社，NKK（南洋興発株式会社）神社の跡地のうち，後2社は厳密には「放置」と言い難いものである。というのは，この2つの神社跡地は旧参道から本殿跡まで，連邦政府の手（観光担当）の職員の手によって，月2回草刈が行われているとの事である。

私共が調査に訪れたのは，8月の中旬であったが，この時は6月に襲った大きな台風の被害のために，手がまわらずしばらく草刈は出来なかったため，羅宗神社跡地の場合は，人の肩あたりまでの草に覆われていたが，それでもそう言われると新しく伸びた柔らかな草で（雨季で高温の季節であるので成長が早い），旧参道から本殿跡まで迷わず到達する事ができた。

さて，NKK神社<sup>24)</sup>はテニアン島アンガールの第4農場の関係者によって建てられたもので，鳥居2基（写真31），燈籠6基（3対），本殿基壇，本殿を囲む柵（玉垣）の一部が残り（写真32），神社の面影をほぼ完璧に残していた。なお，二の鳥居の前には，英文と日本語の「案内板」が立てられており，人の訪れる事が前提にされている。

羅宗神社はテニアン島チューロに1939年に建てられたもので，直営農場を氏子区域にしていた（写真33）。神社跡には，社号標（写真34），燈籠1対（2基，上部無し），大燈籠1対（2基，同）（写真35），階段，本殿基壇，玉垣の一部などが残されていた。



写真29 南洋群島 サイパン島旧北村に建てられたカラベラ神社跡。完全にジャングル化した跡地に放置されたままの本殿基壇部分。これは雑草・雑木を切り払ったあとに撮った写真である。



写真30 南洋群島 サイパン島旧北村に建てられた泉神社跡。完全にジャングル化した跡地に放置された鳥居。





写真31 南洋群島 テニアン島、南洋興発の第4農場の関係者によって建てられたNKK（南洋興発株式会社）  
神社跡地  
今も残る、一の鳥居。社殿までの参道は連邦政府の職員の手で草が刈られている。



写真35 同前  
放置されたままの大燈籠



写真32 同前  
本殿基壇、玉垣が一部崩れて残る。



写真33 南洋群島 テニアン島、南洋興発の直営農場の総鎮守として建てられた羅宗神社  
サイパン、テニアン、ロタ島などには沖縄から多数のサトウキビ栽培者が移住してきた（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編前掲書、18頁）。



写真34 南洋群島 テニアン島、旧直営農場の総鎮守として建てられた羅宗神社跡  
社号標が放置されたまま残っている。



写真36 南洋群島 テニアン島、旧第3農場の関係者によって建てられた橋神社跡  
ジャングルに埋もれ放置されたままになっている倒壊した鳥居。



テナン島のもう1つの神社、橋神社跡地は、また少し異なる。この神社は1939年にテナン島カービーに建てられ、カービー並びに第3農場を氏子区域にしていたが、道路から参道に入るまでは、羅宗神社跡地と同じ状態であったが、その先、社殿にいたるまでは、完全にジャングルに覆われていて、まさに「放置されている状態である。燈籠2基（上部欠け）、手水鉢、倒壊した鳥居（写真36）、本殿の基壇、玉垣（一部欠け）などが残されていた。

最後に昭南神社を紹介しておこう。昭南島の昭南神社は1943年11月、シンガポールを占領した軍の手により、南方鎮守のシンボルとして創建されたもので（写真37）、その建設にはイギリス・オーストラリアの約2万人の捕虜が使役された。マクリッチ貯水池の西の端、貯水池に注ぐ小川を伊勢の五十鈴川に見立て、そこに朱塗りの神橋（太鼓橋）をかけ（写真38）、対岸のこんもりと繁ったジャングルを切り開いて本殿が創られた。3段の長い階段、3つの鳥居を持つ巨大な神社であったが、敗戦とともに軍の手によって爆破された<sup>(25)</sup>。

今日、神橋の木製橋脚が点々と顔を除かせている（写真39）。この他、ジャングルの中には階段や手水鉢、社殿跡地等が残っている。

#### 4 「改変」の例

最後に、人の手が加えられ、現在何らかの形で利用される事によって、景観を変容させている神社跡地について見ておこう。

##### 〔公園〕

神社は平地の、街の中心部に創られる場合もあったが（北京神社、天津神社、建国忠霊廟、新城社等）、多くは街の中心から少し外れた小高い丘陵、山裾に創られた。

これは、日本においても伝統的に見られる神社立地の一つであるが、海外神社においては、この点は意識して創られた。神社というものが街の鎮守として、また日本の支配のシンボルとして位置付けられたため、街を見下ろす、また街から仰ぎ見る事の出来る小高い、風光明媚な場所が求められた<sup>(26)</sup>。

また、神社の清浄感を保つためにも、大きな神社では境内地に隣接して公園が設けられた場合もあった。こうしたことから、今日、神社跡地がそのまま公園として整備されている例も多い。朝鮮神宮跡地の南山公園、樺太神社（写真40）跡地の勝利公園（写真41、42）、龍頭山神社跡地の龍頭山公園、青島神社（写真43）跡地の文化活動広場などである（写真44）。また、街の中の平地に建てられた神社でも、吉林神社跡地が児童公園となっている例もある（写真45）。また、こうした広い境内や隣接して公園をもっていた官国幣社やそれに準ずる神社だけではなく、例えば台湾において社（祠）として建てられた壽社（山裾に立地）跡地も中山公園として整備されているし（写真46）、後で見る新城社（街の中心部に立地）の境内もその半分は新城公園として利用されている。南洋群島の日之出神社（テナン島アンガー、氏子区域第4農場、1939年創立）跡地もメモリアル・パークとして整備されている（写真47）。

##### 〔宗教関連施設〕

神社跡地が今日、宗教施設として利用されている場合も多い。まず、キリスト教会あるいは同教祠あるいは墓地として利用されている例を紹介しておこう。まず、台湾旧花蓮港庁研海庄に建てられた新城社の例である。新城社は1937年に鎮座した社であり、新城の街の中に建てられた。今日、先に

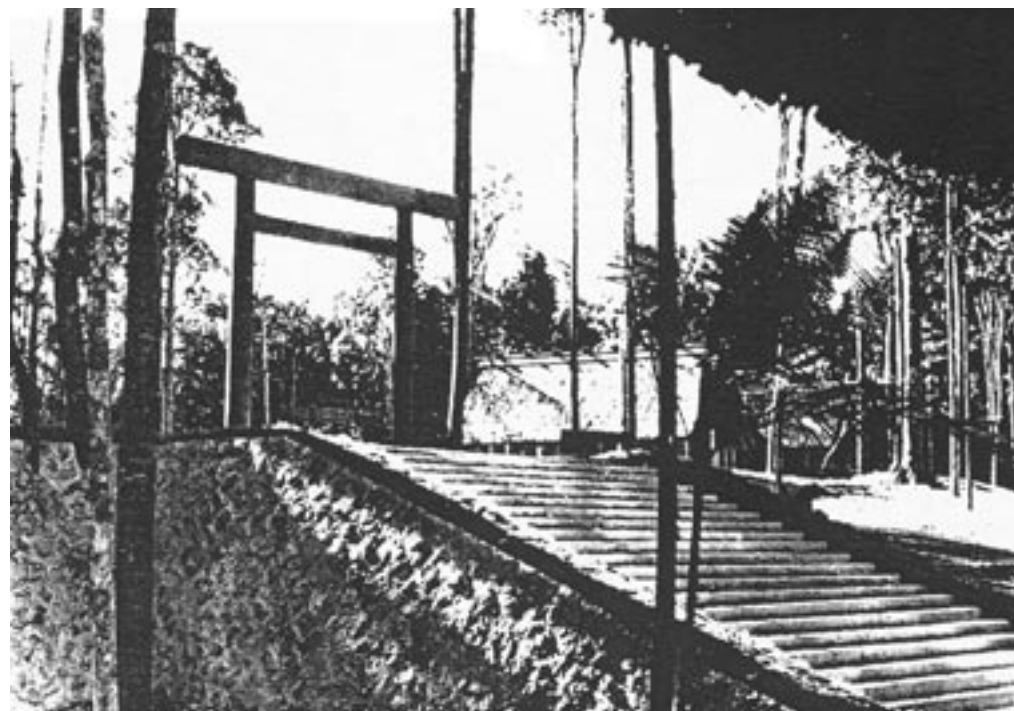


写真37 昭南島（シンガポール）に建てられた昭南神社  
（シンガポール日本人学校小学部社会科部会「昭南神社」、シンガポール日本人会編「南十字星」4号、1992年、22頁）



写真38 同前  
五十鈴川に見立てたマクリッチ貯水池に架かる神橋（太鼓橋）を渡たる神官と山下将軍ら軍首脳（シンガポール日本人会編「南十字星—シンガポール日本人社会の歩み—」、創刊十周年記念復刻版、1978年3月、12頁）



写真39 同前跡  
神橋（太鼓橋）の支柱（木）が今も水面に点々と顔を覗かせている。正面奥が社殿側。



写真40 樺太 旧豊原に建てられた官幣大社樺太神社（樺太庁『樺太庁施政30年史』(下)、明治百年叢書、原書房、1974年1月、1536頁）

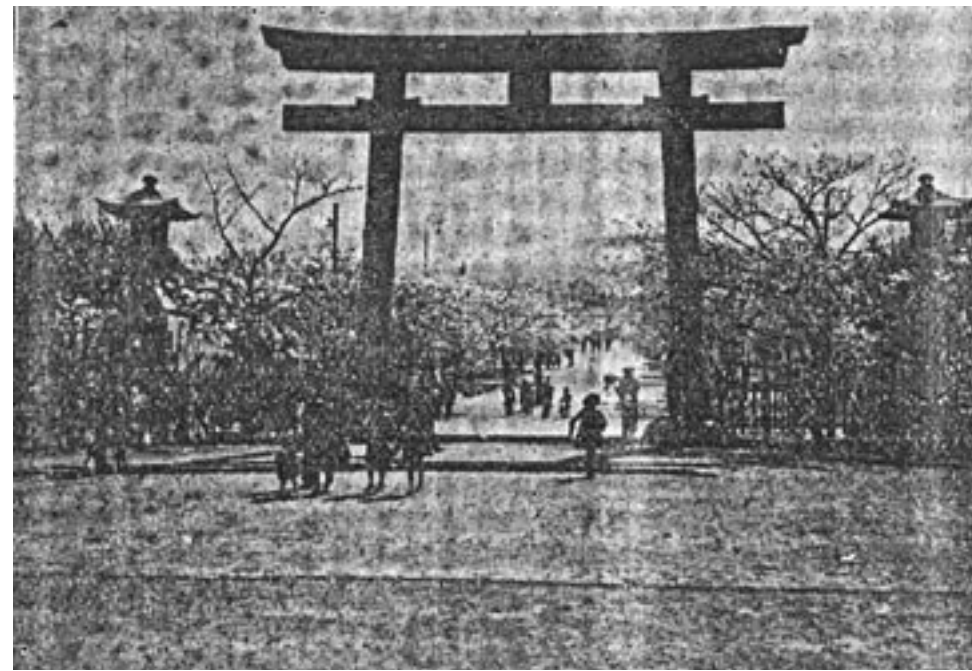


写真43 中華民国 旧青島に建てられた青島神社（小島平八『山東案内』、1939年12月、日華社、279頁）



写真41 同前跡  
参道はほぼそのままの形で残り、途中には燈籠の基壇も点々と残る。境内は勝利公園の一角となっている。



写真42 同前跡  
勝利公園の一角に立つ銅像（対日戦勝利）



写真44 同前跡  
参道はほぼそのまま残り、奥に大石段が見える。これを上がっていくと社殿跡に出る。現在はこの一帯が文化活動広場（公園）になっている。



写真45 満州 旧吉林市に建てられた吉林神社跡  
現在は児童公園になっている。神社の遺構・遺物は全く残っていない。





写真46 台湾 旧花蓮港庁下、壽庄に建てられた壽社跡  
現在は中山公園になっている。階段は旧神社時代のもの。



写真47 南洋群島 テニアン島、旧第4農場の関係者によって建てられた日之出神社跡  
現在はロータリー(公園)になっている。



写真48 台湾 旧花蓮港庁下、研海庄に建てられた新城社跡  
旧境内の半分は現在、天主教会の敷地になっている。天主教会の標識が架かる一の鳥居。



写真49 同前  
燈籠は宝珠・火袋の部分が改変され、また彩色されている。



写真50 同前  
旧本殿基壇の上にマリア像が立つ、また、松の大き木が周囲を囲んでいる。

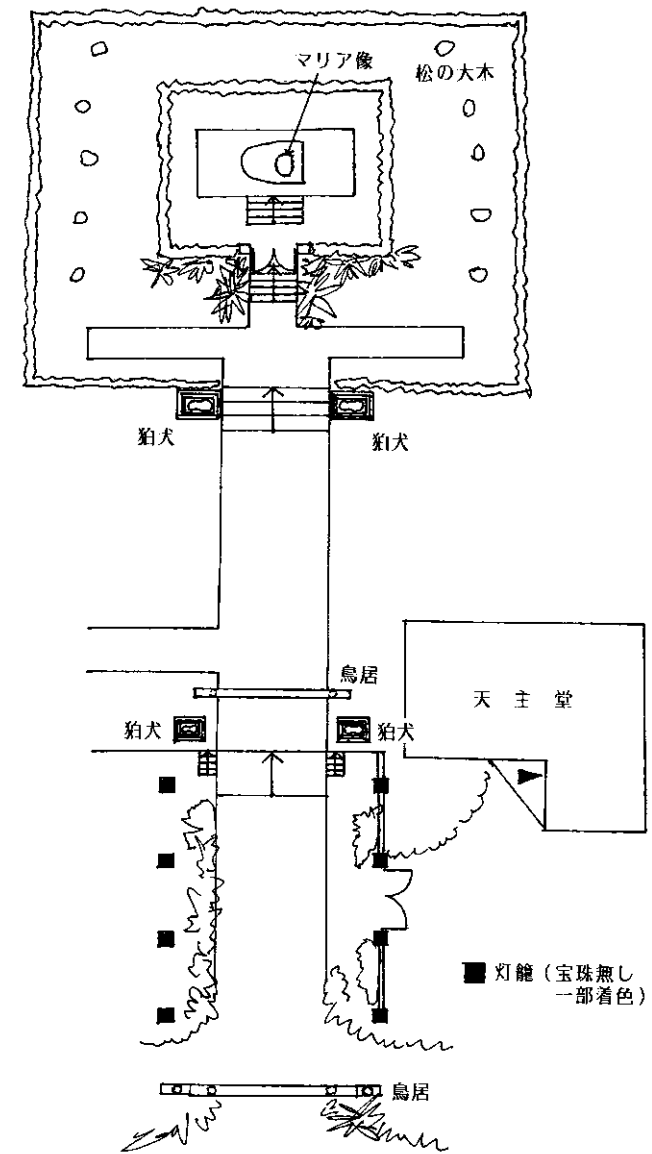


図2 台湾 旧新城社跡(現天主教会)現況図  
(拙稿「台湾の神社跡を訪ねて」、『歴史と民俗』10号、1993年8月、92頁)



紹介したように、境内の半分は新城公園となっているが、残りの半分は天主教会となって利用されている（写真48）。しかも、鳥居2基、燈籠（写真49）8基、狛犬4体、本殿基壇等が部分的に改変されながらも極めて良く残っている（図2）。旧本殿部分は「聖母園」と命名され、旧本殿の基壇の上にはマリア像が建てられている。また、それを取り囲むように松の大木が育っている（写真50）。マリア像がなければ、ほぼ完璧に神社の社殿といった雰囲気である。いずれにしても、日本人の常識的な教会の景観としては異様なものであった。

台湾には、もう1つ、教会に改変されたものがある。旧花蓮港庁下、鳳林郡馬太鞍にあった馬太鞍遙拝所（創立年不明）跡地に建てられた光復教会である（写真51）。現在、遺構・遺物は残っていなかったが、門に至る道は旧参道である（写真52）。

なお、この教会には、この地で布教活動にあたった許南免牧師の記念館がある。その入口には、許牧師の「行い」を讃える板碑が掲げられているが、その「序」には、日本統治下のキリスト教の迫害について次のように記してある。「(第2次世界大戦の勃発とともに=筆者) 漸受日警厳密監視伝道不易每於更深夜静聚集於曾王蘭宅查經学道信者惨遭害遂或被拘捕禁錮者甚衆」。

次に、南洋群島の例である。まず、ロタ島の中心街ソソソに1939年に建てられたロタ神社の例である（写真53）。神社は、マニラ高地が海岸に迫って崖を成しているその下部、崖を背景として建てられていた。現在、本殿基壇、拝殿の基礎部分、そこに至る階段部分が残っているが、本殿基壇の上には白い教祠が設けられ、キリスト像が祀られている（写真54～56）。

また、テナン島マルボ市街の山裾に1939年に建てられた和泉神社（氏子区域マルボ市街並びに第2農場）も同じくキリスト教祠となっている。現在、本殿の基壇とそれを取り巻く玉垣が残っているが、本殿基壇の上にはキリスト教祠が建てられ（写真57）、その中には聖イシドロ（農業守護聖人）像他のキリスト教関係像が祀られている（写真58）。本殿跡の周囲はこの教祠の祭り（聖イシドロ祭。テナンにおけるキリスト教界の二大祭の一つ）に使われるいくつかの施設が建てられている。

教会・教祠ではないが、キリスト教墓地として利用されている例もある。サイパン島の南興神社跡地である。南興神社は1937年チャランカに建てられた。氏子区域が南洋興発会社員及びチャランカ町一円とされているように、チャランカの町には、日本の南洋群島開発に巨大な役割を果たした南洋興発株式会社の本社があり（1923年～1942年）、製糖工場や燐鉱工場、倉庫群、社宅群が立ち並んでいたいわば企業城下町であった。南興神社の南興はこの南洋興発株式会社の名前をとったものであった。

この跡地には、鳥居（写真59）、燈籠4基（2対、内1対は旧本殿基壇上、白く上塗りされている）、そして旧本殿基壇が残っているが、今日、境内地一体が教会墓地になっている。旧本殿基壇の上には白い小屋が設けられ、十字架に磔になったイエス像が祀られており、また基壇の前にも苦しみに耐え横たわるイエス像が置かれている（写真60）。

なお、この南興神社の隣には製糖工場があったが、現在ここには大きな教会が建てられている。

次に、寺院となった例を紹介しておこう。台湾旧花蓮港庁下壽庄に建てられた豊田神社である。豊田神社は1915年に同庄の豊田村に建てられた。豊田村は1910年代に台湾総督府が造った移民村の一で、花蓮港庁にはこの豊田村の他に吉野村、林田村などが建てられた。したがって、この神社は「内地人官営移民村の守護神として総督府において建立鎮座せし」ものであった。この神社跡には鳥居1



写真51 台湾 旧花蓮港庁下、鳳林郡に建てられた馬太鞍遙拝所跡  
現在、光復教会が建つ。



写真52 同前  
教会への参道は、旧遙拝所への参道であった。



写真53 南洋群島 ロタ島、ソソソに建てられたロタ神社  
「日支事変武運長久を祈る」(沖縄ロタ会『ロタ会誌一創立10周年記念一』、1990年11月、182頁)



写真54 同前跡  
現在キリスト教祠になっており、旧拝殿基壇の上には小屋がしつらえている。





写真 56 同前  
キリスト像

写真 55 同前  
旧本殿基壇の上にはキリスト像が祀られている。



写真 59 南洋群島 サイパン島、チャランカに建てられた南興神社跡  
キリスト教会の墓地の中に立つ鳥居。真っ白に塗られている。

写真 60 同前  
旧本殿基壇の上に小屋がしつらえられ、中に十字架に架けられたキリスト像が立つ。階段左脇にも苦悶するキリスト像が横たわっている。



写真 61 台湾 旧花蓮港庁下、豊田村に建てられた豊田神社跡  
現在碧蓮寺が建つ。碧蓮寺の標識が架けられている旧一の鳥居。



写真 57 南洋群島 テニアン島、旧第2農場の関係者によって建てられた和泉神社跡  
旧本殿基壇の上にキリスト像とサン・イシドル像が祀られ、キリスト教祠となっている。



写真 58 同前  
キリスト像と聖人イシドル（農業守護聖人）像

写真 62 同前  
碧蓮寺の入り口に立つ燈籠。





基（写真61），燈籠4基（2対）（写真62），狛犬2体が残存しているが，今日碧蓮寺に「改変」されている。境内には松や楠の大木が繁っている。

最後に，廟・小祠として利用されている例を紹介しておこう。台湾花蓮港庁下の3つの社（祠）である。太巴壠祠は1937年，鳳林郡太巴壠に鎮座した社（祠）であるが，現在は協天宮となっており，1931年に玉里街に鎮座した観音山社は福德祠という小祠になっていたが，いずれも神社の遺構・遺物は発見されなかった。もう一つの織羅社は廟建設中でブルドーザーによって整地がなされていた。

この他，個人の墓地として利用されている例は，台湾旧花蓮庁下瑞穂庄に建てられた抜子社（1933年鎮座）である。この神社跡地は比較的神社の面影をよく残している。階段，燈籠4基（2対），鳥居の柱穴4つ（2対）などが残っている。階段を上りきったところに個人の墓地があった。

#### [忠烈祠]

宗教施設といっても良いのだが，戦前の日本の靖国神社・護国神社と同様，いわば国家的祭祀施設として利用されているのが，台湾の神社跡地である。

台湾神宮を除いて，台湾に建てられた官国幣社，県社クラスの多くの神社跡地が，忠烈祠として利用されている。忠烈祠とは，中華民国の建国以来の抗日戦争，戦前・戦後の国共内戦，国民党政府が台湾に移ってからは，金門・馬祖の戦争などにおいて戦死した兵士を祀る施設である<sup>(27)</sup>。

1940年に日本の靖国神社・護国神社の制度に倣って，台北市に台湾護国神社が建てられたが，戦後は台湾の忠烈祠に改変された。筆者が見た限りでは，護国神社の遺構・遺物は全く発見できなかった。1916年に創立された花蓮港庁の中心的な神社，花蓮港神社（後に県社）は南に花蓮港市街，東に太平洋を望む小高い丘（米崙山）の中腹に建てられた神社であったが（写真63），今日花蓮縣忠烈祠となっている。ここでも，階段部分を除いてその他の神社遺構・遺物は見ることは出来なかった。この，花蓮港神社は川（米崙溪）に掛かる吊り橋のある神社として有名であったが，今日はコンクリートの橋が架かっている（写真64）。

1912年に鎮座した，高雄市の高雄神社（後に県社）（写真65）も今日，高雄市の忠烈祠になっている。ここでは，燈籠（上部は改変）や階段（写真66），鳥居（写真67）などが残っている。

このほか，筆者が直接見た神社跡地で忠烈祠に「改変」された例として，桃園神社が桃園縣忠烈祠となっている事はすでに見た通りである。

#### [記念碑・記念館など]

神社跡地に記念碑や記念館が建てられている例もある。

1923年に台湾，花蓮港庁下の「蕃地」（先住民族の居住地）タビトに建てられた佐久間神社は，今日，文天祥の銅像並びに正気歌の歌碑が建てられている。蕃地タビトは今日では天祥と呼ばれ，タロコ国立公園の中心地になっている。この地は，3,000Mを超える中央山脈から太平洋に流れ込む立霧溪の激流が大理石の深い峡谷を作りあげており，断崖絶壁の峡谷にタロコ族の部落（社）が，点々と存在していた。

日本の台湾植民地支配にとって，漢民族による抗日武装闘争とともに，山岳先住民族の抵抗にも大きな力を注がなければならなかった。この，山岳先住民族の統治に大きな役割を果たしたのが，「理蕃総督」といわれた第5代総督佐久間佐馬太（1906～1915年）であった。佐久間は険しい峡谷を利用して最後まで戦いを継続していたタロコ族を，自ら軍隊・警察を率いて，5年もの歳月をかけて



写真63 台湾 旧花蓮港庁下，花蓮街に建てられた花蓮港神社  
吊り橋の架かる珍しい神社であった。（松本暁美・謝森展前掲書，247頁）



写真64 同前跡  
現在，花蓮縣忠烈祠に改変されている。



写真65 台湾 旧高雄州下，高雄市に建てられた高雄神社  
（松本暁美・謝森展前掲書，246頁）



写真66 同前跡  
今日，高尾縣の忠烈祠に改変されている。社殿に上る階段は，旧神社時代のもの。



写真67 同前跡  
笠木の上に，屋根が被せられた旧高尾神社の鳥居

1914年によく制圧した。佐久間神社は、この作戦中に佐久間総督が重傷を負った「ゆかりの」地であり、後、タロコ警察行政の中心地となったこの地に、総督の名をとり、また総督を祭神として建てられた神社である。そういう意味では、日本（総督府）の山岳先住民族支配のシンボルの存在であった。<sup>(28)</sup>

今日、この神社跡には、長い階段や石組み等が残っているだけで（写真68）、その他の遺構・遺物は無い。そして、ここには石段の途中、旧拝殿あたりに文天祥の銅像（写真69）が建てられ、さらに上った旧本殿あたりに、彼が詠った「正気歌」の歌碑がたっている。文天祥は南宋末の宰相で、元の支配と戦い、捕らえられたが、最後まで漢民族の宋王朝への忠誠を曲げずに処刑された「忠臣」であり、彼が獄中で作った長詩「正気歌」は、この宋に忠誠を尽くす気持ちを詠った有名な歌である。ちなみにこの歌は日本においても、藤田東湖や吉田松陰といった、幕末の「勤皇の志士」達にも大きな影響を与えたものである。台湾政府（中華民国）の漢民族の国家としての正当性をアピールする意図をもって建てられたものであろう。

神社跡地が、社殿部分を中心に記念碑・記念館などに「改変」されて利用されている例は、もう一つ、南洋群島のロタ島に建てられた大山祇神社（マニラ神社）（写真70）である。大山祇神社はマニラ山（サバナ高地）の最高地を北側に少し下った平坦部に建てられたが（創立年不明）、ここは南洋興発株式会社の燐鉱山（1935年発見）があった所である。鉱山の神ということで大山祇命が祀られた。ロタ島が海底から隆起した事を証明する、安山岩の双子岩（貝殻が多数付着）を背景に、社殿と鳥居等が建てられていた。今日、社殿の基壇のみが残っているだけであるが（写真71）、その基壇の前方に「平和の礎」が建てられ、その前の広々とした境内部分は草地となり、また休憩所も建てられて、ピクニック地を兼ねたメモリアル・パーク的（写真72）なものになっている。

この、「平和の礎」は、1973年9月に建てられたもので、経緯を書いた石碑には「第2次大戦中ロタ島に於て戦没されたすべての方々の御霊を慰めるとともに、ロタ島の人々及び日本国民との友情と親愛を深め恒久平和を祈願して建立されたものである。1973年9月16日 平和記念碑建立委員会 アントニオ Ca. アタリ ロタ島政府市長 プルデンシオ T. マングローナ ロタ島地区行政官」とある。

この他、神社跡地全部が記念碑等になったのではないが、神社跡地が公園として整備された所では、その中の一部に記念碑等が建てられている。たとえば、先に見た中山公園となっている台湾の壽社には孫文の銅像が建てられているし（写真73）、朝鮮の龍頭山神社跡地の龍頭山公園には、秀吉の朝鮮出兵時（文禄の役）、朝鮮の水軍を率い亀甲船を考案して日本の水軍に大打撃を与えた英雄、李舜臣の銅像が立っている。さらに、朝鮮神宮跡地の南山公園には1909年、初代統監伊藤博文を射殺した、朝鮮の独立運動家安重根の記念館が建てられている。

#### 【教育施設】

神社跡地が学校や幼稚園として利用されている場合も多い。関東州の大連神社は1909年、大連の南山に創立された神社で、関東州・満州に建てられた神社としては、同市の転山屯に建てられた関水神社に次いで二番目に早く建てられた神社である。

また、大連神社は1944年、旅順に官幣大社関東神宮が鎮座するまで、大連だけではなく関東州の中心的神社であった。境内地約3万坪、本殿など社殿は11もある官国幣社クラスの神社であった。



写真68 台湾 旧花蓮港庁下、蕃地タビトに建てられた佐久間神社跡  
旧階段。この上に文天祥像と正気歌の歌碑が建つ。



写真69 同前  
文天祥像。後方に巨大な歌碑の1部が見える。



写真70 南洋群島 ロタ島、サバナマニラ高地に建てられた大山祇（マニラ）神社  
（沖縄ロタ会前掲書、182頁）



写真71 同前跡  
旧本殿基壇。





写真 72 同前跡  
旧社殿前には 1973 年 9 月、ロタ島の政府関係者等による「平和記念碑建立委員会」の手によって、記念碑「平和の礎」(細見卓・書)が建立され、メモリアル・パークとなっている。



写真 75 樺太 旧大泊支庁下、大泊町に建てられた垂庭神社 (樺太庁前掲書、1537 頁)

写真 73 台湾 旧花蓮港庁下、壽庄に建てられた壽社跡  
中山公園に改変され、旧社殿跡に孫文像が立つ。



写真 76 同前跡  
旧階段と燈籠基壇、それに手水鉢 (階段左、二本の樹の左側に見える)が残る。



写真 74 関東州 旧大連市に建てられた大連神社跡  
現在小学校の敷地となっている。



写真 77 同前跡  
旧社殿跡地に建つ、船舶カレッジの建物。

今日、神社の遺構・遺物は全くなく、小学校の校舎が建ち（写真74）、またグラウンドとして利用されている<sup>(30)</sup>。

満州の長春（後、新京特別市）敷島区に建てられた、長春（新京）神社は1915年に創立された長春の中心的な神社であるが、現在は幼稚園になっている。これについては前に見たので省略する。

樺太の垂庭神社は、1914年旧大泊支庁大泊町に建てられた後、県社となった、大泊支庁の中心的神社である（写真75）。今日、階段、燈籠基壇、手水鉢、鳥居の礎石らしきものが残っているが（写真76）、階段を上りきったところは船舶カレッジのキャンパスになっている<sup>(31)</sup>（写真77）。

この他、南洋群島のテニアン島全体の鎮守として、1934年に建てられた天仁安神社は1944年7月の米軍の爆撃によって完全に破壊されたが、今日その跡地には学校（小・中合同）が建っている（一部教会）。遺構・遺物は発見できなかったが、敷地の一部に鳥居の柱らしき残骸が転がっていた（写真78）。なお、学校の近くにタガ遺跡があり、その側に長野の遺骨収集団や岐阜県マリアナ会などによって慰霊碑が建てられている<sup>(32)</sup>、そこには天仁安神社の大燈籠の笠の部分や基礎・基壇の部分らしきものがあつた。

この他、関東州の小野田神社（大連市泡崖屯、1922年創立、セメント工場があつた）、満州間島省で最も早く、日本総領事館前に建てられた間島神社（1925年創立、龍井街）も学校の敷地になっていたが、遺構・遺物などは全く発見できなかった。

#### 【病院】

病院となっているものは、二つある。一つは、先に紹介した樺太の樺太護国神社である。樺太護国神社の前身は、日露戦後の1908年豊原神社の招魂祭に始まり、1925年に大正天皇の大礼記念事業として同社の境内社として創建された樺太招魂社である。1935年に豊原町旭丘の樺太神社の南隣に移転し1939年護国神社の制度が施行されるとともに、樺太護国神社と改称された（写真79）。境内の敷地は6,000坪、これに周囲の山をあわせると清浄閑雅な神域は3万7千坪に及んだ<sup>(33)</sup>。現在この境内地にはユジノ・サハリンスク市立病院が建っている（写真80）。病院は旧境内の階段を利用して、3段にわたって建てられ（写真81）、最後方はウィルス棟になっている。本拝殿部分はちょうど病院の後庭の役割を果たし、病院関係者や患者の散策地になっている。現在、遺構・遺物としては、階段、本拝殿の基壇（写真82）、燈籠基壇等が残っており、また病院の右側の通路の並木の下には、燈籠の基壇のようなものが残されており、「奉献／佐々木時造／昭和十年□月」の文字が彫られていた。さらに、後方、譲成中の土地には燈籠の笠の部分と思われるものが転がっていた。

もう一つは、関東州大連市霞町に建てられた沙河口神社である。1914年10月に創立され、大連神社に匹敵する規模をもった神社であった。大連神社は日本人住宅街にあつたため、現地人にとってはやや近寄り難い雰囲気をもっていたためか、大連神社よりこちらの沙河口神社の事をよく覚えている人が多かつた。

日本時代に建てられた沙河口駅前大通りを南に進むと、ロータリーにでる。その北東の角が神社跡地であるが、今日、大連市口腔医院の大病院が建っている。神社の遺構・遺物で確かなものは全く見つからなかつた。

#### 【軍施設】

軍関係の施設になっているものとしては、まず台湾の花蓮港庁下に建てられた吉野神社跡地がある。



写真78 南洋群島 テニアン島に建てられた天仁安神社跡  
今日、学校・教会の敷地になっているが、学校に敷地の中に、旧鳥居の残骸らしきものが、転がっていた。



写真79 樺太 旧豊原町に建てられた樺太護国神社本拝殿  
写真82はこの基壇である（樺太庁前掲書、1536頁）



写真80 同前跡  
今日、ユジノ・サハリンスク市立病院が建てられている。



写真81 同前  
病院は旧階段を生かして、3段に建てられている。



写真82 同前  
旧本拝殿の基壇。病院の最後方、裏庭のような恰好になっている。



吉野神社は先程紹介した豊田神社と同じく、官営移民村に建てられた神社で、花蓮港庁下では最も早く1912年に創立されている。

現在、神社跡地は半分に仕切られ、半分は旧郡長宅、そして残り半分が兵舎として利用されている。境内地を画する石垣はほぼそのまま残り、その中に日本家屋も残されているが、その他の遺構・遺物は見つからなかった。

中華民国の天津日本租界にある大和公園に建てられた天津神社は、中華民国に建てられた神社としては、青島神社について2番目に古い神社で、1915年に建てられた。現在、この地には「八・一礼堂」が建てられているが、神社の遺構・遺物は発見できなかった。

この他、中華民国の上海日本租界（英米共同租界）に建てられた上海神社（1933年創立）は、その境内に1932年の上海事変の戦死者を祀る招魂社を設けていたが、今日軍関係のビルが立っており、神社の遺構・遺物は全く見られない。また、関東州の旅順市の高台、大正公園に紀元2600年を記念して「満州の地に官幣大社」を、とのかけ声のもと、1938年に創立され敗戦の前年の1944年10月に鎮座した官幣大社関東神宮跡地には、今日海軍の施設が建てられている。<sup>(34)</sup>

#### [その他]

以上、「改変」の例として神社跡地に工作物が建てられた場合を、主な工作物毎に見て来たわけであるが、最後にその他の例を見ていこう。

すでに、公園になっている例で一部見て来たが、樺太神社（写真83）の社殿跡地には、戦後すぐに共産党幹部のクラブハウスが建てられたが、今日では会社の事務所になっている（写真84）。また、朝鮮神宮の本殿（写真85）跡は植物園（温室）（写真86）になっているし、青島神社の本殿部分は今日、青島有線テレビ台（写真87）になっている。また、本殿跡地がジャングルの中に埋もれている例として紹介した、昭南神社の旧境内はゴルフ場の一角となっている。

その他、1933年に創立、翌年鎮座した台湾の総鎮守、官幣大社台湾神社（写真88）は、1944年6月、従来の北白川能久親王ならびに開拓三神に加えて、天照大神を合祀して台湾神宮と改称したが、その鎮座祭の直前の10月に飛行機が墜落、社殿の一部が炎上した。<sup>(35)</sup>

今日、神社跡地には、台湾の代表的ホテル圓山大飯店（写真89）が建てられているが、神社の遺構・遺物は残っていない。

樺太の豊原神社は樺太の中心、豊原市豊原町に建てられた（後、県社）に。創立年は1910年で樺太において最も早い官幣大社樺太神社と同年であるが、創建はそれより2年早い1908年である。

戦後、敷地跡には保育園が建てられたが、数年前より用途変更されて、現在は死体検死所として使用されている。遺構・遺物としては、燈籠基壇らしきものと、鳥居の台石（饅頭）らしきものが、彩色されて（保育園時代に手が加えられたものか）残っている。

同じく、樺太の真岡神社（後、県社）は、豊原に次ぐ第2の都市、真岡町の高台に1910年に建てられた（写真90）。1945年8月のソ連軍の激しい真岡上陸作戦で社殿は炎上したが、正面アプローチ部分の階段、燈籠基壇、手水鉢などが残っている。今日、サハリン郵船会社の社屋（写真91）となっている。

また、樺太豊原に1924年に創立された北辰神社は、境内の周囲が巾着状に川に取り囲まれる独特な境内地であったが、その跡地は現在、5階建てのアパート団地になっており、神社の遺構・遺物は



写真83 樺太 旧豊原町に建てられた官幣大社樺太神社社殿部分  
（『望郷樺太』、国書刊行会、1979年5月、48頁）

写真84 同前跡  
戦後すぐに共産党幹部クラブハウスが建てられたが、現在は会社の事務所になっている。



写真85 朝鮮 旧京城府南山に建てられた官幣大社朝鮮神宮の本殿部分（「上の広場」）  
（朝鮮神宮奉賛会編『恩頼 朝鮮神宮御鎮座10周年記念』、1937年11月、294頁）

写真86 同前跡  
本殿部分は今日、南山公園の温室（植物園）になっている。





写真 87 中華民国 旧青島に建てられた青島神社殿跡  
今日、青島有線テレビ台の建物が建っている。

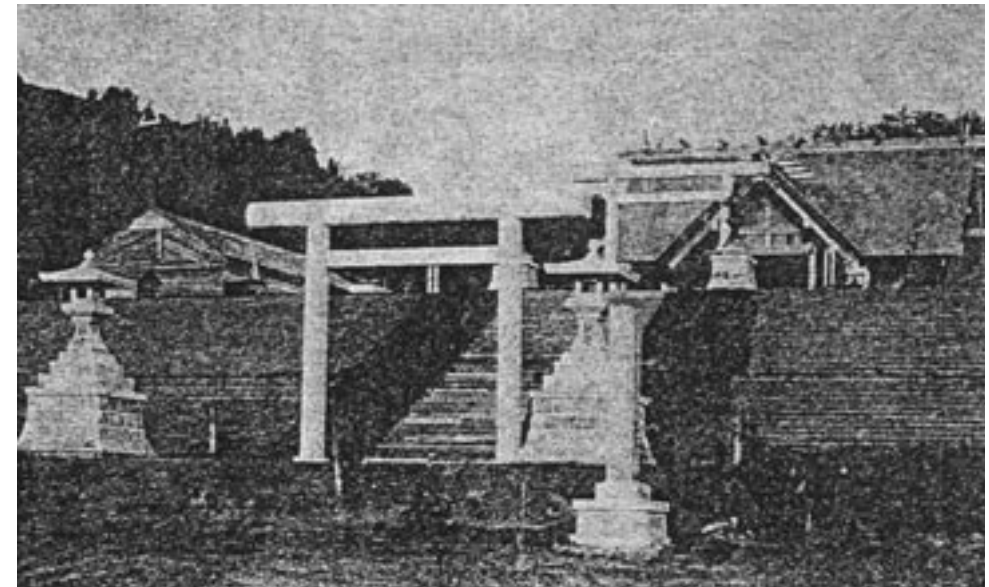


写真 90 樺太 旧真岡支庁下、真岡町に建てられた県社真岡神社  
(樺太庁前掲書、1537頁)

写真 88 台湾 旧台北市に建てられ  
た官幣大社台湾神社（神宮）  
(松本暁美・謝森展前掲書、  
241頁)



写真 89 同前跡  
今日、圓山大飯店が建ってい  
る。



写真 91 同前跡  
旧石段の上に建つ、サハリン郵船会社



まったく見られなかった。

中華民国の北京神社は1940年に北京特別市布貢院に北京6万人の居留日本人の鎮守として建てられた。中華民国には、北京神社創立以前に、これまで紹介した、天津神社、青島神社、上海神社など25の神社が創立されていたが、この北京神社は中華民国の模範となるべき神社として建てられたものであった。実際、蒙疆神社、済南神社、南京神社などは、この北京神社を範として後に創られた。境内地は6,000坪で、占領地なので社格は持たなかったが、官国幣社並みの待遇を受けた。<sup>(36)</sup>

現在、この地には中国社会科学院の建物が建っており、神社の遺構・遺物は残っていない。

この他、個人の住宅地になっているのは、先ほど紹介した南洋神社、それに関東州の柳樹屯稲荷神社（1919年、大連湾会王家屯）の跡地である。別の地に再建された、ペリリュウ神社の旧神社跡は採石（ライムストーン）場となっており、中華民国で最も早い1915年に創立された、青島の台東鎮神社は今日商店街となっている。これらの神社跡地では、いずれも神社遺構・遺物は確認されていない。

#### 【畑地・牧草地】

営造物ではなく、畑地として利用されている神社跡地は、先に紹介した台湾の瑞穂祠の本殿部分（檳榔畑）、樺太の大山祇神社（1921年創立、野菜畑）、そして同じく樺太野田町の稲荷神社（創立年不明）の跡地（牧草地、写真92）である。



写真92 樺太 旧真岡支庁下、野田町に建てられた（野田）稲荷神社跡  
現在牧草地になっている。手前、中央及び右側に旧燈籠の基壇らしきものがある。

## IV 景観変容の要因

以上、海外神社跡地の残存状況や海外神社跡地の現況、その景観の変容について見て来た。日本の敗戦、植民地体制の崩壊により、機能を停止した海外神社の跡地が、今日、実に多様な景観をもって存在する事を確認出来たと思う。最後に、では、そのような多様な景観の変容をもたらした要因はいったい何であったのであろうか、まだ、仮説の段階であるが、この事を考えて見たい。

まず、第1に、海外神社跡地の景観変容の多様性を考える場合、戦前に日本の植民地や占領地となった地域（勢力圏）が、戦後、どのような国家体制をとったのか、例えば「社会主義国家」になった

のかどうかであり、また「社会主義国家」にならない場合でも、戦後から今日に至る、その国家と日本の関係——これには、日本の植民地支配の総括、戦争責任などのいわゆる「歴史問題」の存在や、領土問題の存在なども含まれる——さらにはその国、地域の国際的環境等、総じてこれら政治的要因が作用しているという事である。

例えば、神社が「再建」された例が、いずれも南洋群島の神社であったことである。今日、再建された6つの神社がある島（サイパン島とパラオ島・ペリリュウ島・アンガウル島）は、戦後、アメリカの信託統治領になり、1975年にサイパン、テニアン、ロタ島などの1群が北マリアナ諸島連邦として、アメリカの自治領となった。また、1981年には、パラオ、ペリリュウ、アンガウルを1群として、パラオ自治政府が発足した。まず、こうした1970年代後半からのアメリカからの「独立」という事が、海外神社「再建」の一つの前提である。さらにこの両国は、パラオ共和国を筆頭に、親日意識の強い国とされている。両国にある「再建」された6つの神社の内、最も早い例が、1981年の彩帆八幡神社（サイパン島）であり、他もいずれも1980年以降に再建されているという背景には、こうした政治的背景が横たわっているのである。

いわば、日本の植民地時代の遺物ともいえるべき、神社の「再建」などは、「社会主義国家」体制をとっている、旧満州や中華民国（現中華人民共和国、以下、中国と表記）、あるいは樺太（1990年まで「社会主義」のソ連邦であった）といった地域では、宗教政策や領土問題とも絡んで不可能な事であった。

また、「歴史問題」を抱えている、朝鮮（現韓国）、中国でも不可能な事であった。結局、南洋群島の地域で神社の「再建」が可能であったのは、その地に作られた国家が「社会主義国家」ではなく、また「歴史問題」を表だって抱えてなく、さらに日本との関係が「良好」な国家であったから可能な事であった。

また、台湾において、例えば桃園神社が忠烈祠に「改変」されたとはいえ、旧社殿がそのまま残っていたり、あるいは同じく教会に「改変」されたとはいえ多くの遺跡・遺物を残していた新城社、さらには個人の所有地になっている玉里社を初め、台湾では神社跡地に多くの遺構・遺物を残しているのも、1972年の日中国交回復まで、日本が戦後、台湾の中華民国政府を、中国の唯一の正統政府としていたという事に見られる、日本と台湾の国家関係がその背景にあったのかもしれない。



写真93 中華民国 旧青島に建てられた青島神社社殿部分  
青島有線テレビ台（写真87）はこの跡に建てられた。尚、写真左上の鳥居の台石（饅頭）は今日でも残っている（青島市档案馆・青島日報社編『百年青島』、2000年11月、青島出版社、19頁）。

第2に、海外神社跡地の現況、その景観変容の多様性は、神社跡地の属する国家や或いは日本国の社会の変動にも関係があると言う事である。例えば、境内が公園になり、また本殿部分が有線電視台になっている事を紹介した、中華民国の青島に建てられた青島神社の社殿は、実は、日本の敗戦後、一時期、壊されずに中華民国の忠烈祠に「改変」されていた<sup>(37)</sup>。しかし中華民国政府が国共内戦に敗れ、中華人民共和国の支配に入ってから、さらに「改変」されて実業学校・新華学校となった。ここまでは、第1の国家体制の転換、政治的要因に関わるのであるが、しかし、この段階でも社殿は残っていた(写真93)。そして、この社殿部分が撤去されたのは、実は1960年代の後半の文化大革命の時期であったのである<sup>(38)</sup>。この時期、中国の多くの廟や寺院が破壊されたが、青島神社の社殿が破壊されたのもこの時であった。中国の神社跡地の景観変容を考える場合、この文化大革命の影響は大きかったのではないかと推測している。

また、台湾は、1945年の日本の敗北によって、中華民国政府の支配下になるのであるが、2年後の国共内戦に敗れた国民党軍民の台湾流入時に起きた、台湾住民と(本省人)と中華民国政府(外省人)との衝突、いわゆる2・28事件の際、筆者が調査したものではないが、台中公園(台中神社跡地)の大鳥居が軍隊の手によって破壊されたり、また、台中の清水神社の社殿が、2・28事件の際、住民が立て籠もったため、軍隊によって破壊されたとの事である<sup>(39)</sup>。

このように、同じ国家、政治体制のなかでも、その時々の社会状況によって、神社跡地・社殿跡地の景観が変化しているのである。

また、旧南洋群島の6つの神社が再建された問題にしても、第1に述べた政治的要因とともに、日本側の社会の変化というものも関わっていた。南洋群島の神社が「再建」される背景には勿論、それを推進した日本人慰霊団や清流社などの願い、理念があるのだが、「再建」を受け入れる側の積極的理由としては、日本人観光客(戦没者遺骨収集団や慰霊団、さらには戦前この地に大勢移住していた沖縄の関係者を含む)<sup>(40)</sup>の積極的誘致という問題があった。

彩帆香取神社の「再建」にあたっては、日本の香取神宮連合会とともに、サイパンの観光局が1役買っていた事、またテニアン島において旧神社跡地の草刈を月2回行っているのは、観光局の職員であった事、さらに、同島のNKK神社跡地には英語と日本語の解説版が建てられていた事、日之出神社跡地が、鳥居や燈籠を中心として公園化されていた事等々のことは既に見た通りである。この他、私たちが、パラオ島で南洋神社の「再建」運動に関わった現地の人からの聞き取りを行った際、こちらからの質問でもなかったにもかかわらず、「再建」運動をしている日本人たちが、「特別」の思想を持った人たちである事を率直に語ってくれた。でも、それでも、それによって、その人たちを含めて観光客が増える事の必要性を語っていた。

ところで、ここが大事な点であるが、こうした、日本人の観光客の積極的誘致が可能であったのも、1980年代以降の、日本社会のいわゆる国際化、海外旅行者・出国者の急増という、日本社会の変化という事があって、初めて可能であったという事である。

第3に、いうまでもない事であるが、海外神社が建てられた、その国や地域の「開発」の度合い、経済発展の度合い、それと関連して、神社が建てられ場所が都市部・市街地か農村部であったか、また、都市部・市街地のなかでも、中心部(平地)に建てられたのか、それとも山裾や丘の上に建てられたのかによっても、神社跡地の現況、景観変容の多様性が出てくるという事である。

例えば、台湾の、神社の木造建築物を含めて、そっくりそのまま利用している桃園縣忠烈祠(旧桃園神社)、また、木造建築物は残していないが、石造建築物を多く利用している天主教会(旧新城社)などの例も、戦後すぐの新しく作り変える経済的余裕がない中で、旧社殿・旧境内地をとりあえず利用したまでと考える事もできる。事実、先程紹介した高雄市忠烈祠の「高雄市忠烈祠重建記」によれば、「光復初期…殉国之壮烈乃就日人神社因陋就簡稍事修葺権作奉祀英霊之所…斯祠乃敵之遺物改建深為各界詬病…」とある。最初、忠烈祠は高雄神社の社殿を少し改造して利用していたが、「敵の遺物」(日本の植民地支配の痕跡)をそのまま利用している事が問題になったというのである。結局1976年に建て替えられる。

また、桃園神社の社殿をほぼそのまま利用していた桃園忠烈祠は1980年代後半に、その事が問題になった。台湾の経済的發展の中で、その余裕が出てきて、初めて、そのことが浮上してきたのである。しかし、結局、これは日本の植民地支配の遺物として、新たに読み替えられ新たな価値を付与される事で、そのまま残されることになった<sup>(41)</sup>。

また、台湾の場合、比較的、神社遺構・遺物が多く残っていたのは、筆者が集中的に調査した地域が台湾東部の旧花蓮港庁下であった事(27社の内、21社)、に影響されているのかも知れない。周知の如く、花蓮港庁下を含む台湾東部は、漢民族の多い西部(大陸側)と異なり、アミ族を中心として先住民族の多い地域であり、西部に比較して「開発」の遅れている地域である。もし、西部のある地域を集中的に調査すれば、違った結果が出てきたかもしれない。

こうした事は、南洋群島の神社の遺構・遺物が良く残っているという事とも関連する。

たとえば、南洋の神社はテニアン島に代表されるように、島の中心地に建てられた神社を除けば、多くは日本人移住者(南洋興発株式会社)が砂糖黍栽培の為に作った農場・村毎に建てられた。しかし、敗戦により、日本人移住者の引きあげ後これらの地の多くは放置され、開発されなかったため、テニアン島のように連邦政府の手によって草刈が行われている場合は草地として、そうで無い場合はジャングルの中に埋もれてしまい、結果として遺構・遺物がたくさん残っているという状況があるのである。

また、樺太も全体としては、「開発」の遅れた地域である。泊居神社は、鳥居、本殿基壇、燈籠基壇、記念碑、忠魂碑と神社の遺構・遺物がほぼ全部揃って残っている例として紹介したが、そこでも指摘した如く、この地は泊居の街を見渡し、さらに海を見晴らす事の出来る絶好のロケーションにある。現在、草地のまま放置されているわけだが、もしも、この泊居の地が、「開発」が進められ、人口が急増し、都市としての整備が必須になっていたならば、公園として整備されても良い地である。しかし、ソ連邦時代でも「開発」が進められなかった樺太の地域は、特にペロストロイカ政策の展開、そしてソ連邦の崩壊という「自由主義経済」の進展の中で、一部の地域を除いて、ますます経済的困難が増しているようである。この泊居の地は、かつて日本統治時代に漁業の他に、王子製紙の工場街として発展した街である。この神社の真下には現在もその広大な工場が立地している。そしてそれはソ連邦下でも稼働していたが、ペロストロイカ政策の中で操業を停止し、今日では、泊居に電力を供給する火力発電所として、細々と稼働している状況であった。こうした、泊居の経済発展の「遅れ」が、多くの神社遺構・遺物を残しているのである。

また、都市部、街の中の平地に建てられた神社は、新城社のように教会に「改変」され、その遺



構・遺物が良く残っている例もあるが、多くは公園として整備されたり、また大きな建物が建てられたりして、区画はなんとなく残されているが、神社の遺構・遺物はほとんど残っていないし、(吉林神社、沙河口神社、北京神社、天津神社等) そもそもその区画も変容をうけ、位置さえ確定できないものもある(台東鎮神社)。

第4番目に、神社跡地の景観変容の多様性は、その地域の文化伝統の違いと関連しているということである。

南洋群島ロタ島のロタ神社や和泉神社キリスト教祠に改変され、また、教会ではないが、サイパンの南興神社がキリスト教の墓地に改変されていた。これなどは、南洋群島が日本の委任統治領になる以前の400年にもわたるスペイン支配、その後のドイツの支配の中で形成されてきたキリスト教文化の現地人への浸透・定着がその背景にある。

また、台湾でかなりの神社が忠烈祠となっていた。忠烈祠の思想は、日本の靖国・護国神社と同じく、勿論、近代の国民国家による国民統合という新たな思想であるが、それにしても、人を神として祀る文化伝統の存在も見逃せない。また、神社の社殿がそれに利用されるということも、国、地域によって細かな部分での違いはあるものの、全体として見た場合の、日本、朝鮮、中国の廟、寺院、神社の社殿建築(燈籠や狛犬や鳥居も含む)の類似性という事も横たわっている。

最後に、5点目として、以上の4点と少し次元がことなるが、支配・勢力が交代した事の「刻印」いう点にふれておこう。神社跡地に教会や寺院、廟、或いは忠烈祠が建てられたという問題である。

世界史的にも見た場合、かつての支配者の宗教施設であったものを完全に破壊せず、むしろその痕跡を残しながら、その地に新しい支配者の宗教施設を作るとというのが、宗教勢力交代の一つのパターンであるということである。徹底的に破壊し、その痕跡を完全に消してしまったり、全く別の所に新しい支配的宗教施設を造るより、その方が、宗教勢力交代の印象を強く民衆に焼き付け、「刻印」し、かつての支配的宗教に対するダメージになるということである。

この事は、拙稿でインドの宗教紛争の発火源である、北インドのヒンズー教の聖地アヨディアにあるモスク(イスラム礼拝所)の例や、スペインのコルドバ観光の目玉商品であるメスキータという宗教施設がなぜ醜い外観をもっているかを例に紹介しておいたので、詳しくはそれを参照して欲しい。<sup>(42)</sup>又、1966年に台湾を訪問した神職たちが、「形骸は殆んど昔ながらの姿をとどめながら」(この時点では、筆者が調査した1990年代以降よりも、神社跡地には、もっと多くの木造建築物を含む神社の遺構・遺物が残されていた=筆者)、忠烈祠という「全く内容的に変質された神社跡地に立ったとき」、「一種名状しがたい惨たる感慨が胸にこみあげて」、「ひそかな憤りを覚えた」。そして、点々として残っている鳥居や燈籠や狛犬などは「いっそこれらも除去してくればよいのに、という気持ちになった」<sup>(43)</sup>と述べている事と関連する事である。

こうした、支配の交代の「刻印」という点では、第1の政治的要因の問題と絡むが、神社跡地が公園として整備あるいは再整備された場合、公園の名称や公園の造作物に植民地支配の打破を、あるいは新しい国家の成立を印象付ける(この中にはいわゆる「伝統の創造」も含む)名称がつけられ、造作物が建てられる。台湾の神社跡地で、壽社が中山公園として利用され、孫文の銅像が建てられている事を紹介したが、台湾において神社跡地が中山公園として利用されている例は他にも多くみられる。樺太神社跡地が勝利公園として整備され、兵士の銅像が建てられているのも、また、名称はその事を

意味していないが、公園の造作物として、南山公園(朝鮮神宮跡地)に安重根の記念館や龍頭山公園(龍頭山神社跡地)に李舜臣の銅像が建てられていることなども同じ意味合いであろう。

もっとも、近代の国民国家における公園は一般的にそういう性格を持っており、神社跡地だけがそのようになったわけではないが、神社跡地における、このような「改変」は、日本の支配の終了と新しい国家の誕生を人々により強く、「刻印」する上で大きな役割を果たしたであろう。

以上、海外神社跡地の現況とその景観変容の多様性をもたらした要因といったものを、5点にわたって指摘してきたが、実際は、これらの5点の内のいくつかが、相互に絡み合って増幅しあい、また消しあって、今日の神社跡地の景観を形作っているのである。<sup>(44)</sup>

本稿で紹介した神社跡地の現況とは、あくまでも筆者の調査時点での現況である。調査年で最も早い例は、1990年であり、また本格的に始めたのも1992年といずれも10年以上も前のものである。確認していないが、その調査時点での現況、景観は、今日、2004年段階ではもう、異なっているものになっているかも知れない。また、これからも、変化していくであろう。しかしながら、その異なり方あるいは変化も、上に述べたような5つの要因が相互に絡み合って変化したもの、あるいは変化して行くものであるという事だけは言えるのではないかと考えている。

## おわりに

以上、神社跡地の現況、景観変容を、これまで筆者が訪れた79の海外神社跡地を素材に検討してきた。最初に述べたように、この79の神社跡地は地域的な偏りがあり、最も多くの海外神社が建てられた朝鮮の神社跡地や、満州、中華民国に建てられた神社跡地の調査はこれからである。その意味で、このレポートはあくまでも中間的なものである。COEの残りの3年間の中で、これらの地域の神社跡地の調査を集中的に行い、海外神社跡地の現状、景観変容のサンプルを増やすとともに(資料化)、今回析出した5つの景観変容の要因の妥当性を検証し、体系化していきたい。

## 注

- (1) この、3班の課題については、香月洋一郎「環境と景観の資料化と体系化」(神奈川大学21世紀COEプログラム拠点推進会議『非文字資料研究』No.1, 2003年10月)参照。
- (2) この、海外神社跡地を素材とする研究は、筆者と富井正憲が中心となって行っているが、富井は海外神社が創立される前、創立されて以降、廃止されて以降の3つの時代の植民都市の空間の形成と変容の過程を、環境感という視点から考察を行う事を予定している。
- (3) 海外神社の全体像及びその研究史、今後の課題等は、さしあたり拙稿「〈海外神社〉研究序説」(『歴史評論』602号, 200年6月)参照。本稿でも、そこで紹介した海外神社研究の基本文献、各地の海外神社についての基本文献、論文等を参照したが、紙数の関係から一々列記する事は原則として避けた。従って、その点については拙稿を参照されたい。ただ、そこで落ちていた文献、あるいはその後の研究成果については記載していく。この点で、ここでは、前田孝和「神社本庁の海外神社調査史について—海外神社研究について—」(『皇學館論叢』27巻3号, 1994年6月)、辻子実『侵略神社—靖国思想を考えるために—』(新幹社, 2003年9月)をあげておく。
- (4) これについては、富井正憲、藤田庄市、中島三千男「旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号, 2004年3月)参照。

- (5) これについては、富井正憲、中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン「旧南洋群島の神社跡地調査報告」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号, 2004年12月刊行予定) 参照。
- (6) この調査は、2000年度神奈川大学共同研究奨励助成金(研究代表者、郷田正萬「東アジアにおける新国際秩序構築に関する研究」)による調査である。
- (7) この調査は、2002年度奈川大学共同研究奨励助成金(研究代表者、山口健治「環東シナ海伝承文化の総合的研究」)による調査である。
- (8) この調査は、文部科学省科学研究費補助金(2001年～2004年)、研究代表者木場明志「植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究」による調査である。
- (9) 同上。
- (10) 注(6)に同じ。
- (11) 朝鮮においては、1945年8月16日～23日の1週間の間に、「神祠・奉安殿に対する放火・破壊」が136件と、「警察署に対する襲撃・占拠」などの149件に次ぐ多さであった(森田芳夫『朝鮮終戦の記録—米ソ両軍の進駐と日本人の引き揚げ—』, 巖南堂, 1964年, 94頁)。
- 終戦前後の神社のあり様は多様であった。上記のように、放火・破壊された神社(安東神社等)、戦闘・空襲によって炎上した神社(天仁安神社等)、日本人の手によって爆破されたり(昭南神社等)、焼かれた神社(南洋神社、朝鮮神宮本殿等)、また、米ソ両軍や現地政府に接収された神社(新京神社等)などであった。この点については、『神社本庁十年史』(1956年、神社本庁、41頁～49頁)及び佐藤弘毅「戦前の海外神社資産一覧」(『神社本庁教学研究所紀要』第4号, 1999年2月)参照。
- (12) 以下、本稿で紹介する、神社の創立年、祭神、境内地などの基本的事項については、佐藤弘毅「戦前の海外神社一覧Ⅰ」(『神社本庁教学研究所紀要』第2号, 1997年3月)、同「戦前の海外神社一覧Ⅱ」(『神社本庁教学研究所紀要』第3号, 1998年2月)によった。なお、これをもとに、藪田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』(2004年、吉川弘文館)の「付編」にも、佐藤編の「終戦前の海外神社一覧」が載っている。
- (13) 泊居神社及びその跡地の現況については注(4)参照。尚、以下本文において紹介する樺太の現況については全て、この注(4)の論文によった。
- (14) 玉里社及びその跡地については、拙稿「台湾・旧花蓮港庁下における神社の創建について」(岩井忠熊・馬原鉄男編『天皇制国家の統合と支配』, 1992年、文理閣)及び「台湾の神社跡を訪ねて」(『歴史と民俗』10号, 1993年8月、神奈川大学日本常民文化研究所)を参照。なお、以下、本文において紹介する台湾の神社の現況の内、1992年の調査に関わるものは、後者の論文によった。
- (15) 建国忠霊廟については、嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の建設」(『神道宗教』156号, 1994年9月)参照。
- (16) 注(11)の『神社本庁十年史』によると、新京神社は戦後ソ連軍の宿舎として利用された。現況の確認は、2004年9月に同僚の孫安石、大里浩秋によっても確認された。
- (17) 関子嶺神社の話については、注(14)拙稿(1993年)参照。但し、関子嶺神社という神社は、注(12)の佐藤論文(1997年)でも確認されていない。
- (18) この点については、横森久美「台湾における神社—皇民化政策との関連において—」(『台湾近現代史研究』4号, 1982年10月)、菅浩二「台湾最初の神社御祭神とナショナリティー—台南・旧開山神社(鄭成功廟)について—」(『國學院大學日本文化研究所紀要』第88輯, 2001年)参照。
- (19) 現在のところ、この5つの他に、今回の調査では、足を延ばす事はできなかったが、アンガウル島(パラオ共和国)のアンガウル神社がある。また他の地域の例としては、現地ではなく日本国内に「再建」された関東州の大連神社の例がある。これについては、注(30)参照。尚、南洋群島の神社及び現況については、『具志川市史』第4巻(2002年3月、同市編さん委員会編)の第3編第2章の「南洋群島」(今泉祐美子執筆)及び、第4回海外神社視察研修団『サイパン・パラオ戦没者慰霊の旅(報告書)』(1982年9月、神社本庁)それに注(5)の調査報告書参照。
- (20) 注(19)の神社本庁前掲報告書参照。
- (21) 南洋神社については、神社本庁前掲報告書及び『官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖』(1941年、同

- 神社奉賛会)参照。
- (22) ペリリュウ神社については、滑川祐二『ペリリュウ神社奉賛会設立趣意書』(1982年、ペリリュウ神社奉賛会事務局)参照。尚、これによるとペリリュウ神社は、1934年12月に鎮座した南興神社に由来するという事である(1頁)。
- (23) この神社は、注(12)の佐藤論文にも、『神道史大辞典』にも出ていない神社である。創立年代は不明であるが、残存している鳥居の柱には、「泉神社」「昭和十八年三月建立」と刻まれている。注(19)の今泉論文の「表15 神社」(676頁)にも記載がなく、ただ「図2サイパン島」(587頁)の泉村のところに神社のマークが付されている。
- (24) この神社も、注(23)の三つの文献には出ていない。但し、この神社と後出の、日之出神社との関連が不明である。この二つの神社は極めて近接した位置に建っており、日之出神社は佐藤の研究によれば、1939年に創立せられた神社で、その氏子区域は第4農場となっている。ところが、NKK神社も創立年は不明であるが(一の鳥居の柱に「昭和十六年一月十日」と刻まれている)、氏子区域はやはり第4農場であった。(同じく、一の鳥居の柱には「第四農場蔗作人一同」と刻まれている)。この点は、今後の調査に待ちたい。
- (25) 昭南神社及びその現況については、シンガポール日本人学校 小学部社会科担当部会「昭南神社」(シンガポール日本人会編『南十字星』4号, 1992年)、篠崎護『シンガポール占領秘史』(原書房, 1976年)の211頁～214頁、参照。
- (26) この、神社建設の位置、都市空間の中における位置付けについては、青井哲人「神社造営よりみた日本植民地の環境変容に関する研究」(京都大学博士学位論文, 2000年3月)参照。
- (27) 忠烈祠については、蔡錦堂「台湾の忠烈祠と日本の護国神社・靖国神社との比較」(台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』(中京大学社会科学研究所, 2003年3月31日)参照。
- (28) 佐久間神社創建の事情については、山口政治・富永勝編著『東台湾太魯閣小史—研海支庁開発の歩み—』(1991年2月、花蓮港「新城・北埔会」)参照。
- (29) この碑の成り立ちについては、石上正夫『日本人よ忘るなかれ—南洋の民と皇国教育—』(1983年9月、大月書店)215頁～216頁参照。
- (30) 大連神社については、水野久直『明治天皇御尊像奉遷記』(1966年、赤間神宮社務所)、『大連神社八十年史』(大連神社八十年祭奉賛会, 1987年)、新田光子『大連神社史—ある海外神社の社会史—』(1997年、おうふう)等、参照。なお大連神社は、1947年3月ソ連側に引渡されたが、大連神社社司水野久直は3月同社の御神霊を捧持して帰国。赤間神宮欄宜に就任とともに復興(遷宮)事業に乗り出し、1980年赤間神宮境内に大連神社新社殿を竣工し、正遷座祭を行った。
- (31) 亜庭神社については、樺太・元亜庭神社社司山田信義「終戦と亜庭神社」(寒川神社社報『さがみ』第61号～67号, 1978年10月～1979年4月)参照。
- (32) これについては、注(29)石上前掲書210頁～211頁参照。
- (33) これについては、『北海道神社庁誌』(1999年、同編輯委員会編)の第2部第4章「樺太の神社」(執筆 前田孝和)1338頁参照。
- (34) 関東神宮については、石川佐中『関東神宮—悲劇の三百二十二日—』(1987年6月、平活版所)参照。
- (35) 台湾神宮については、蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』(同成社, 1994年)、本康宏史「台湾神社の創建と統治政策—祭神をめぐる問題を中心に—」(台湾史研究部会・檜山幸夫『台湾の近代と日本』, 2003年、中京大学社会科学研究所)、菅浩二「台湾神社創建から戦時体制、廃絶まで—1901～1945—」(川村邦光編『戦死者を巡る宗教・文化の研究』2003年、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室)参照。なお、又吉盛清『台湾 近い昔の旅—台北編—』(1996年、凱風社)では「1945年(昭和20)の敗戦によって、台湾神社は中華民国に接収された。この侵略主義のシンボルは、接収と同時に大槌やつるはしでもって徹底的に打ち壊されて跡形もなくなってしまった。打ち壊しは、長年の占領下の恨みを晴らすかのように進められたという。三基の鳥居はなぎ倒され、本殿は廢材となった。…台湾神社は台湾の地から消えてしまった」(270頁)としているが、1966年3月に行われた、神社新報社の現地調査では、燈籠、狛犬、玉



垣の一部などはまだ転々と残っている。旧手水舎も残るとしている（『神社新報』、1966年4月23日、第949号）。なお、この神社新報社の調査結果は注（14）の中島前掲論文（1993）の117頁から119頁に一覧表で掲載している。

- (36) 北京神社については、小笠原省三『海外神社史 上巻』（海外神社史編纂会、1953年）の「北京神社の奉斎まで」（251頁～273頁）参照。また中華民国の神社については、拙稿「戦前期・中華民国における海外神社の創立について」（『研究年報』20号、2002年3月、神奈川大学法学研究所）参照。
- (37) 『青島指南』（民国22年〈1947年〉、中国市政協会青島分会）に「山之西面有勝利後所建之忠烈祠（日本神社旧址）、斎祀抗戦八年戦区殉難軍民之英霊」とある。
- (38) 青島市档案館、孫保鋒氏の教示による。
- (39) 注35、前掲『神社新報』の記事参照。
- (40) 日本人の旧南洋群島地域の観光客（慰霊団も含む）は1970年代後半頃から急増、97年以降減少に転じたが、2000年から回復に向っている。ちなみにサイパン島では約50万人、その内の約75%を日本人が占める。（大野俊『観光コースでないグアム・サイパン』高文研、2001年7月、137-8頁）。又、ペリリュー神社再建に際しパラオ政府観光部長が来日した時、観光部長は、神社を含む「日本時代の名所古跡の復元は必要であるが、あく迄もその目的は観光資源に他ならないとの主張であった」（滑川裕二『ペリリュー神社奉賛会設立趣旨書』、同奉賛会事務局、1982年8月、16頁）
- (41) 台湾大学呉蜜察氏の御教示による。
- (42) 注（14）、拙稿前掲論文（1993年）参照。
- (43) 注（35）、神社新報社前掲記事参照。
- (44) もっとも、神社跡地が、戦後どのような現況を持ち、景観を変容させているのかは、注（11）で見たように、日本の敗戦前後に神社がどのような処遇を蒙ったのか、という事にも規定されている。しかし、この点の研究は今日十分に行われていないので、この点を組み込むのは後日を期したい。ただ、例えば、新京神社も大連神社も共に、その時期に社殿の破壊がなされなかったにも関わらず、今日、神社跡地の現況、景観の変容を異にしているのを見ても、本稿で析出した5つの論点は有効であると考えている。

#### 【謝辞】

本稿は筆者の10数年にわたる、海外神社跡地調査の中間報告である。11度にわたる調査では、本当にたくさんの方々にお世話になった。1992年の台湾調査、2000年の北京・天津調査、2003年の旧樺太調査については、論文を発表し、そこで謝辞を述べているのでここでは省略させていただき、それ以外の調査でお世話になった方々のお名前を記して謝辞に代えさせていただく。

1996年の台湾調査では、玉山神学院（当時）の林道生氏、中京女子大学客員教授大場俊賢氏、シンガポール調査では、同志社大学土肥昭夫氏、琉球大学高嶋伸欣氏、現地在住のTETSUBUMI Ogyu氏、諸江修氏、坂田憲子氏、シンガポール日本人学校の北内伸子氏を初めとする諸氏、シンガポール日本人会の杉野一夫氏、シンガポール・オーラル・ヒストリー館、2001年の韓国釜山・京城調査では、郷田正萬氏を中心とする共同研究グループの諸氏、2002年の中国東北部（旧満州）調査では、龍谷大学の木場明志氏をはじめとする共同研究グループの諸氏、東北師範大学の林嵐氏、同曲暁范氏、吉林省社会科学院満鉄資料館の李力氏、延辺大学学生姜梅玉氏、延吉市在住崔景文氏、神奈川大学学生崔明玉氏 2003年の青島調査では、新潟大学の柴田幹夫氏、青島市档案館の孫保鋒氏、延辺大学学生姜梅玉氏、本年（2004年）の北マリアナ諸島連邦、パラオ共和国調査では、東京外語大学の内海孝氏、神社本庁の前田孝和氏、元南洋群島協会理事小菅輝雄氏の御令嬢太田敏江氏、北マリアナ諸島連邦日本人会ロタ支部長古川明於氏、現地人アントニオ・アタリック氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（ロタ島）、テニアン島在住の萩島武司氏、名鉄フレミングホテルの杉本氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（テニアン）、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（サイパン）のGenevieve S. Cabrera氏をはじめとする諸氏、北マリアナ諸島連邦博物館のNoel B. Quitugua氏、パラオ国立歴史的文物保存館のWalter R. Metes氏、同Lynda Dee Tellames氏。共同調査を行った富井正憲氏、大坪憲子氏、サイモン・ジョン氏

The number of overseas shrines built in the Asian region from the Meiji Restoration until Japan's defeat in 1945 have been identified to date is over 1600. There is clearly an opportunity to conduct further research in this area and since 1990 my team has been investigating the remains of these shrines. To date we have surveyed 79 sites, a figure which amounts to only 5% of the total. Based on these surveys this discussion will analyze changes in the scenery of the sites of these former overseas shrines and the major causes of such changes.

Initially one must consider how the remains of the 79 shrines are being used at present and how each site has changed with the passing of time. The sites can be divided into the following four categories. The most common category, with 53 examples or 67% of the survey, are shrine remains that have in some manner been transformed through human intervention. Examples of this transformation include the creation of parks, religious or remembrance sites, and one can often see the establishment of memorial stones, museums and other education-related facilities. The second most common category, with 20 examples or 25% of the survey, is where the remains of the shrine are neglected and unused so that in some instances the sites were completely consumed by the jungle. In the third category, of which there are 5 examples or 6% of the survey, all in the Micronesian region (formerly known in Japan as Nanyo), although the activities of the shrines were halted with the end of the war, they have been rebuilt and reconsecrated since the 1980s. In the fourth category, of which there is only one example or 1% of the survey, a shrine established over a former site of worship was returned to its original state after the war and 'resurrected'. This example is the shrine devoted to Coxinga (Tei Seiko in Japanese) in Taiwan. So the four categories can thus be labelled: 1) transformed; 2) neglected; 3) rebuilt; and 4) resurrected.

Having considered various changes in the appearance of overseas shrines, questions now remain over what instigated them.

Firstly there were the many political issues within pre-war Japan's colonies and possessions and its field of influence overall, regarding Japan's relationship with each emerging postwar nation. The strength of this relationship depended on what national structure was adopted (socialist or capitalist), and even in cases where capitalism similar to that of Japan was adopted various historical complications have remained. This issue goes some way to explain why all the rebuilt shrines discovered to date are solely in the Micronesian region. Secondly, even within the same national structure, there can be special cases where a nation or society dramatically changes direction. Examples of this are the Great Proletarian Cultural Revolution in Communist China and the February 28 Incident of 1947 in Taiwan. Thirdly, these changes depend on a number of geographical factors including the extent of development of the nation or region concerned, whether it is an urban or rural area, and in the case of an urban area, whether it is in the center of town or on the outskirts. Generally, as development of an area increases, shrine sites are less neglected and the sites are likely to be transformed in some manner. Fourthly, the causes of change are related to the cultural traditions of the nation or region concerned. This is the primary reason why transformation to another kind of religious site was most obvious in Taiwan and Micronesia. Fifthly, in a diversion from the previous four interrelated factors, where the shrine was a perceived symbol of Japanese domination, the shrine site became a place where it was possible to demonstrate a shift in political dominance and the religion that accompanied it by acting as a 'seal' denoting the new order. In this way many shrine sites in Taiwan have been transformed into sites of remembrance or Sun Yat-sen parks (where statues of Sun have been erected).

Undoubtedly these five causes are intertwined, exacerbate each other, and in some cases offset each other to produce the complex picture of the various overseas shrine remains that has emerged.